四季 別冊

（1）

昭和46年7月号

四季の詩……丸山　薫
ぼくの詩……大木　実
非日常的なもの……杉山平一
草雨亭……田中冬二
会員の作品

潮流社
東京都千代田区内幸町1ノ2ノ2大阪ビル
<電話>03—504—0478
<振替>東京91375
頒価100円　送料25円

四季の会で……

四季の詩

丸山　薫

けさ私は上京して、この会場へやってきました。家を出るために車を待っている間、テレビジョンを見ていました。たしかNHKだったと思います。水槽のなかに実験者が録音機を入れて、熱帯魚だったか金魚だったか、小さな魚の動静を録音しているのです。それを傍からアナウンサーが、実験の目的や結果をいろいろと訊いている。深水の中の物音は、ふつうは聞こえない。いわんやサカナは声を出さないし、その気配など人間の耳には感知されないはずです。ところが機械を通して、それが聞こえるのです。テレビの音を小さくしていて、私の気分も落ちつかなかったので、よくわからなかったのですが、「エラの音まで聞こえますよ」と、実験者は言っていました。その言葉で、思わず耳を澄ますと、なるほど魚が呼吸するためのエラの開閉する音が、ちゃんと機械を通して耳に入ってくるのでした。

以上のことは、一つの比喩として申したのですが、このごろ「四季」の詩について、「この激動する変革期にあたって、いやに落ちついているじゃないか。旧態依然としたアナクロニズムの静かな詩を書いているじゃないか」というようなことを、ちょいちょい言われ、またそう思っている人々もいるようです。そうした人々には、いま私がお話したような、機械でも挿入しないと耳にとどかない水中のかすかな音、サカナのエラの音、それこそ「四季」の詩そのものの在り方ではないかと思われるかもしれません。が、そうではないのです。実は逆説的意味でこの比喩を用いたのです。

「四季」の詩は、みなさんが読まれておわかりのように、主知的抒情詩の道を踏んでいます。踏んでいるという意味は、一点に凝と佇立していることではない。踏んで進みつつあるということなのです。ただ、読んでわけのわからない、独りよがりの詩を書かないということなのです。みなさんの詩的感受性にピントの合う鮮烈清新のポエジーこそ、私たちの目指すところです。

読者個人によって、多少の差はあると思いますが、「四季」の詩を読むと、何かはっきりしたものがある程度はわかる。日本語で書いている以上、詩はやはりそうでなくてはならぬというのが、すくなくとも私の信念です。

ところで時勢の動きに押し流されて、その中で大声疾呼している

声は、実をいうと叫びと轟音との相殺によって何も聞こえないのです。それこそ水中の魚のエラの音のようなものになってしまって、水中聴音機でも使わないかぎり、なにも聴こえないのではないかと考えます。それに反して、うわっつらの流れに巻きこまれない、個性を通した静かな声は――いや、ここらで詩作品といい直しましょう――真にポエジーを求めて近づく人の心には、よく浸透するのではないでしょうか？　いわゆる流行の現代的センスではないかもしれないが、そういういたずらに喧騒なだけで、うわすべりした、それこそ現代的ナンセンスの詩人のポーズを私は信用しません。

人が騒いでいる。同じように自分も騒ぐことは、騒音だけは聞こえる。しかし、その個人の言っていることの内容は聞こえません。文芸は、心情・思想のひろがりをもっているが、創作はあくまで個人のものです。個人を通さなければ、どんな思想も美も、世の中の共感をかちえないでしょう。作品にはならないと思います。そのようなことを、ここに出かける前に考えながら、東京駅で下車するとすぐここへ参りました。

私は去年の三分の一以上を病院に入っていました。まだ躰もほんとうでないし、生活してゆくための仕事をするのに手いっぱいで、「四季」のためには、ときおり八木君から同人間の意見について了解を求められたり、相談を受けるくらいで、充分なこともできなかったのは残念です。

一昨々年と去年と、この読者の集いだけには出席して、大ぜいの方々にお会いできたことは、せめても私の欣快とするところです。今日出席された方たちのなかには、去年も一昨年もご出席になった方、また例年のように遠方からはるばる駆けつけた熱心な方もおられるようです。「四季」同人の一人として感謝に堪えません、と同時に、みずから駑馬に鞭打って、われわれの雑誌をみなさんとともに、すこしでもよいものにしたいと念願努力するつもりです。

このあと、みなさんからご質疑やご希望が出て、私たちとの話し合いに入ることと思うので、私の一方的なお喋りはこれで打ち切りにします。

（同人）

ぼくの詩

大木　実

「朝日年鑑」「文芸年鑑」のようなものをご覧いただくと、ぼくの名前のしたにカッコして詩人としてあります。「詩人」という看板をいただいているわけで有難いのですが、「詩人」というのを「広辞林」でひいてみると、詩を作る人、詩に巧みな人、文人などと出ています。ぼくが詩に巧みかどうかは疑問ですが、詩を作ることは間違いのない事実です。

ところで、詩の原稿料とか、詩に関連したことで、ぼくが受ける物質的な報酬はきわめて少なく、その十倍ぐらいのものを、お勤めによって給料としてもらっているわけです。看板の詩人としては生活できなくて、お勤めのほうで生活費を得ているということです。お勤めをしながら詩を書いているということが、本当なのでしょうけれど、自分の気持では、詩を書きながらお勤めをしている気持です。気持が詩のほうに向かっています。

友だちと知り合いの中間ぐらいにあたる人で、K君という人がいます。このK君はお勤めをしていません。また、子供もいません。いつか、「君は、どうして子供がいないのだ」と聞くと、子供をもつと詩に打ち込めなくなるから、という答えが返ってきました。ともかくK君がどうして暮しを立てているのか知らないが、お勤めももたず子供ももたず、K君は日々詩作に精進しているわけです。

K君は「詩の女神は嫉妬深いから、ほかのことをやってはだめなんだ」と言うのです。一篇の詩に要するエネルギーはK君の言うように、厳しいものなのかもしれません。そういう意味で、お勤めをしていて、子供を三人ももっているぼくなど、詩人の資格がなく、よい詩が書けないのかもしれません。

ぼくの第一詩集は、昭和十四年十二月に出た「場末の子」という詩集ですが、ここにいらっしゃる若いかたは、まだお生まれになっていない、三十年前のことです。ぼくは実際にはそれよりも早くから詩を書いているのだから、三十五、六年詩を書いています。飽きないで、よく書いていると思うのですが、数にしてどのくらい書いているのか。数えたことはないのですが、四百から五百ぐらいの間ではないかと思います。四十年で割ると、十年で百篇、一年で十篇月に一篇ぐらいということになります。多いのか、少ないのか、わからないが、一生懸命やって、ぼくの場合、このくらいということなのです。

四十年近く詩を書いてきて、いまのぼくの感想は、「はかないなぁ」という気持です。これは、ぼくの書くものが、はかないものであり、ぼくの人生そのものも、はかないものであるからだと思うのです。

詩のすべてが、はかないものだとは思いません。たとえば高村光太郎さんとか尾崎喜八さんとか、堂々とした骨格のたくましい詩もあります。けれど、詩というものは、もともと、はかない、悲しい、人間の悲哀の情が根底にあるものが多いのではないでしょうか。

佐藤春夫さんは、「詩は愚痴を上手に聞いてもらうことだ」というふうに、なにかにお書きになっていたと思うのですが、ぼくも十何年か前、若い詩人から「要するに彼（大木実）の詩は、生活の愚痴だ」と言われて弱ったことがあります。

当時、ぼくは病気をしていたし、子供も小さく、生活もいまより貧乏でしたから、心身ともに参っていた時期でした。ぼくのどういう詩を指して、そう言われたのか覚えていないが、ショックでした。いまなら、そのとおりだ、とその言葉を逆手にとって居直ることもできますが、当時はそういう元気はありません。また、佐藤さんだから「詩は愚痴を上手に聞いてもらうことだ」と言っても、みなさんが納得されるが、ぼくが「ぼくの詩は、生活の愚痴だ」と言ったら、それでおしまいになってしまうわけです。

ぼくはお勤めをしていますが、お勤めの地位も低いですから、拘束されることが少なく、生活面でも体面とか体裁を考えるということもありません。思うことを気やすく気がねなく書けるわけです。こういうことを書いたら恥ずかしい、みっともない、とかいうことなしに書いています。人によっては、いくぶん露悪的なところがあるという見方もされるかもしれませんが、ぼくはもともと詩よりも

丸山薫詩集　連れ去られた海　潮流社版
海洋写真入りB六変型版二〇〇頁　定価三七〇円
△四季会員に限り送料共△

この多彩なタブローは海洋詩人としての作者のたくましい成長をよく示している。この力強くうねるリズムは、これまでのこの詩人の海洋詩に見られなかったものである。この詩人は、海という女のもりあがる乳房を眺めて悠々として広い甲板を闊歩している。

――河盛好蔵――

小説、それも私小説を書くつもりでいましたから、なりふりかまわず書いているところがあるのです。ぼくの書くものが、どちらかといえば叙事的要素が多く、現実的で、具体的で、むしろ散文の世界に近いのは、そのためではないかと思います。

ここに丸山（薫）さんがいらっしゃいますが、三十年くらい前、「君は小説を書く人だね」と言われたことを、いまでも覚えています。丸山さんのご期待にこたえることができなくて、小説はできずこれからも小説はできないでしょうが、自分の詩を書いてゆきたいと思っています。

（同人）

非日常的なもの

杉山平一

私は、ついさきほど大阪から、この会場に着いたばかりです。先日、「四季の会」に「出席」の旨ご返事を出してから、そのことによって、ここにくるまで、いつも圧迫されている感じでした。偶然ここにやってきたのだったら、どんなに楽しいかと思います。私は、なにか約束をすると、非常に気が重くなるのです。

私は若いとき、人のやれることが、やれないようなところがあったのです。学校を出て勤めることになったとき、できるだけサラリーマンのようなビジネス・ライクな人間になろうと、平凡な髪型にし、平凡な洋服を着て、普通の型にはいり込むことにあこがれ、一生懸命努力してきたのですが、このごろになって、それが非常に耐えられなくなってきました。すべて人に会うのは偶然にして、一切の約束から逃れたい気持になってきました。

私は、詩というものが、いまだによくわからないのですけれど、それはきちんとした合理的なものではない。とにかく〝詩人〟というのは、会社でも〝あれは詩人だ〟といわれるような人は、たいていい、電話のかけかたが下手であったり、遅刻したりして、勤めがうまくいかない人でしょう。非日常的なものの形容詞に、詩人ということばを使っているようです。そして、詩というのは、そういうところにあるのではないかと思います。「四季」七・八号にも、たくさんの新しいかたのいい詩が載っていて、刺激を受け、感心しました。たとえば「桃太郎航海日誌抄」は、たいへん楽しいものでした。ちょうど、ガリバーの漂着した小人国の島へ、二百年たってからやはりその島へ漂着した子供がいて、二百年後の島の様子を書いた童話があるが、そんなのを思い出しました。「桃太郎航海日誌抄」はおもしろく読みましたが、そういう非日常的なもの、役に立たないもの、それが詩のよさであろうかと思います。

さきごろ気がついたのですが、デパートは五階、六階、七階と高層になっていて、経営者はなんとかして多くの人を呼ぼうとしているわけです。してみると、一階というのは、いちばん大事なところでしょう。人々を二階や三階や上にあげるもとになるところですから、一階には、いちばん人をひきつけるものを置かなければならない。一階には人間が生きていくうえで、いちばん大事なものが置いてあるのかと思うと、そこには、われわれが生きていくために必要なものは、なにもない。ハンドバッグ、首飾り、耳飾りというようなものばかり置いてある。デパートが、いちばん運命を賭けているところに、ああいう無駄なものがある。ということは、実は人間にとって、非実用的なものが、いちばん大事なのではなかろうか。人間は、最後はたべることよりも、ああいうところ、ああいうものが大事なのではないか。

詩も、そういうものではないのだろうか。非日常的であるがゆえにいちばん大事なのではないか。そんなことを感じました。いかがでしょうか。

（同人）

会員の作品

散る

小山順一郎

それは　胸の糸がひき抜かれていくような
そんな紫色の中の　白いうずく夢だった

髪をひきちぎり　唇をもぎ離していく
八月の嵐が　ベッドの下に吹きすさび吹き
すさび——

どんどんどんどん　と激しく戸を叩く音に
わたしは　不意に　遠い記憶を呼び覚まされ
た

翡翠の空に落ちた　ゆれる光彩の窓——
わたしの女友達の母が　亡くなったのだっ
た

蒼ざめた使者——わたしは　あゝと息を呑
んで
もう一つの夢の暗合に　しばらく立ち尽し
てしまう

お弔いに行く　手筈をきめたあと
引き開けようとしたカーテンの陰で　眩暈
がする

あんなに高い　大きな顔を誇っていた
日まわりは　みんな風に倒れて　鳴く鳥も
なく

冷たい脈の通じた　地下の川に
桐の葉が一つ息を絶え　はらりと落ちる
——影

わたしはネクタイを結び　折紙を一つ折り
こうこうと空の鳴る　道をいそいだ

信じられないことだ　信じられない
この世に立つものはみんな散る——
しかし……

蟬の声よりも低い　無情の煙は流れ
無常を説く　五僧の声は深くしみる

友は　黒いレースを着て　小鳥よりもなお
小さく
そっと見上げたその瞳だけが　そんなに静
かに——

どれだけの声にならない時が　そのカーテ
ンのかげを
夜と共に　吹きあれていったことであろう

気をおとさないでね　わたしは最後に声を
かけ
風の中を帰ってきて　じっと窓にすわった

不思議なことだ　この薄い空の中に声があ
り
何かの糸が　それに弾かれて鳴っている—

すべてはベッドに　そしてベッドは通じて
いる
一線に引く蘇えりの糸と　白雲の眠りへの
道と

しかしわたしには分らぬ　こんなにも青い
ものが
何故とつぜんに散って　無くならねばなら
ぬのか

きみの　あの肉も形も　今はどこにあるだ

ろう
もう三年にもなる　ことばと影になってか
らの時……

生きて死んだものは　いつ誰が弔ってくれ
るだろう
風に呼び起こされた魂が　いつまで生きる
ことだろう

窓には白い光彩が降り――それはもう秋だ
った
わたしは　一日中　倒れた日まわりを眺め
ていた

秋の貌

諸貫　寛

風　青さ
空のどこかで鐘が鳴り
鳥はふたたび
私らの上で優しく飛びかった

風　赤さ
林のどこかで木の葉が光り
山への道は
草木の正しさで明るかった
だいだい色の高原の彼方で
風が鳴らす鐘いまは秋
落ち葉する雑木林のはずれの小道を
悲しみは枯葉にのって
風を追いかけて行った
山をおりて行った

はるかなところへ
それとも……

ああ　おまえを呼ぶのは　なに
おまえの行くのは　どこ

風と木の葉と優しい姿だった
風は葉を愛した
葉は風にうたれた

愛は
愛とは

人間をさけて
人に知れない高原の
だいだい色の陽だまりの中に
あたたかく
ういういしく
息づいていた

砂漠

上野　あつし

ゲリラの兵士が
旅客機の黒い残骸の上で
何ものかを嘲り
生き生きと笑っている。

砂漠は
潰滅の果てに在り
勝利もなく敗北もなく
生きものがひそかに死に変わるところ。

横たわる生体を過って
一瞬恍惚の時間が駆けぬけ
思念は退色し拡散し。

それから風と砂が動き
死を平らに均すのだ。

砂漠の兵士は

いったい
いつまで笑っているというのか。

鞍馬寺

水野　ひかる

背後に比叡があった
うきたつような不安

山門からふきおりてきた風は
どうやら
緑の部屋をくぐりぬけてきたらしい

石段をとびこえる
青年の髪
杉木立にかげる
時間の畔

ふしぎなやすらぎのなかで
わけもない不安がみちるとき
大地をたしかめながら
深呼吸するわたしの喉

水引草の紅いちいさな唇
道にせりだした樹の根
冷気が刺すわたしの肌

ゆっくりとシャッターをきる瞼のなかでは
重たくぶらさげていた現在(いま)が
またたくまに
浮きあがる

春

高畑　敏光

町角の小さな帽子屋
主人は暇そうに店先で
四十歳がらみのでっぷりとした
客をつかまえて
碁を打っている
そこだけ陽が射している

いつも　ここを通るたびに
ぼくは停(た)ち止まる

あってもなくてもいいような
帽子屋だけれど――

立原道造に

鈴木　礼子

とおいむかしのことなのに
とおいスペインの海のなかで
ひとり燃える唄のかいがら。

思い出すことが　いまに
生きることかのように
スペインのあおのはるかさを
太陽と海のふれあうその一点をみるとき
あの死が
こたえきれない問いのように
わたしを吃らせてしまう

どんなふうに　手を
さしのべたらよかったのだろう
どんなふうに　その問いを
うけとめたらよかったのだろう
ああ
どこへ向かって
何に向かって
なにを問うのか

このひとつの魂の透明さよ
ゆえなき生の　いたずらよ

坂

圓子　哲雄

太陽の
海の中に入るのを見よう
それはいつか理想となって
僕は灯台の見える
岬を登った
そしていつか
遠雷となって
海に没していく入り日を見よう
それまでは
七彩に変わっていく坂の上で
いつまでも僕を待っていよう。

翼があったら

小野　夏江

一体　幾つの谷間を
わたしは　越えてきたのだろう？

わたしは　今　寂しい
深い　緑色の谷間で
冷水で　唇を濡らしているのだ。

わたしは　翼をもっていない
まぶしい　銀色の翼を。
だから　それらの谷間を見に行けない。
もう一度　覗きたいのに——

遠くからの　こだまのように
重なりあった　音色が
湧き水を　震わしている。
唇も　調和を求めて　震える。

それらの音たちは　過ぎた日々の
谷間から　まばゆく　湧き上っている。

わたしは　翼がほしい
それらの谷間を　見に行きたい。
わたしの　生きている目で
わたしだけの　哲学の目で——

空しい！　寂しい！
黙々と　流れを見つめる。

青白い唇の　翼のないわたしが
ゆらめいている。
翼があったら！

わたしは　銀色の涙で
翼をなめらかに撫で　飛びたとう。

そうして再び　この「今」という谷間に
舞い降りることはなく
知らない　永遠の草原で
翼を　やすめたい。

枯野の道で

日夏　堇路

ふと振向いて　少女は
しばらくぼくの顔を凝視め
いっときやさしい笑いを見せた
けれども次の瞬間
大声で泣叫びながら
枯野の道を駆け去って行った
ぼくにはわけの分らぬことだった

その時　背後に残忍な刺戟を覚え
素早く向き直ると　夥しい鴉の
発情し乾いた嘴だった
だが　こんな処に鴉とはふしぎだ
目をこすりよくよく見透かすと
鴉なんていない　いるのは
抜殻のようにゆれるぼくひとり
手と足とに蔓草を絡ませながら

孤舟

坂本　稔

夕ぐれの仁淀川のほとり
つながれて
舟はひとりゆれていた
あそんでいた

ちかちかと光り輝く
千万のさざ波とたわむれていた
ゆったりと尾をふって
舟は時おり笑ったりした

逝く夏のことも知らず
つながれて
舟はひとり

八歳の滝尾敏行によせる詩

森　真紀

あなたは　よく遊んでいたブランコで
きのうはじめて遊んだにちがいない
空にとびこみ　芝生を風のあしで蹴り
空にすいこまれ　芝生のみどりにふきあげられ
そしてあなたは　いつのまにか
めのまえでざわめいていた白樺の葉のいちまいになって

あなたの好きなものは熟れたいちご
きょうの朝
あなたは頬ばったくちのなかから
ひたひたと赤くひろがってくるいちごに
またも飲みこまれてしまったにちがいない
そしていま　あなたはわたしの前に
愛らしいこえをあげて

ああ　響かないその子供のこえ
遊びつかれたからだをわたしの膝のうえに
なげて
あなたの仄かなぬくもりがわたしを仄かに
ふるわせる
そのあなたも

あしたになれば
この樹陰のすずしさそのものになって
そのやさしい顔すらもとけてしまって

だがそのとき　わたしは想うだろう
なぜ　あなたはあなたでなくてはならなかったのか　と

里帰り

杉浦　正一

急勾配の山肌にくいつき育っている小麦と
か
こまごました野菜
崖は一層切り立って
松の幹は
美観に恵まれないこの村の花のように

空の頂上を装った
私の妻の母は
里帰りした私たち子供連れの帰路を
間近のバス停留所まで見送ってくれた
軈て緩やかな坂道を
バスはゆっくりと降ってくる
私の妻の母は
白内障という眼病のために視野が淡くな
った
心臓も動悸不全という
軈てその義母も
土と木と草と樹木だけのこの谷峡いの村で
川ばたの石のように化石していくのであろ
うか
いつとはなく降りそそぐ時刻の
蕎麦の花は白く
夏の夢のように私の眼を眩しくさせる

足跡

内田 幸雄

二千年前の土に
子どもの足跡が残っていた
もとは大きな湖にすぎなかった日本海に近
い新潟の土に
小さな指の子が棲んでいた
東京のデパートで開かれた展覧会に陳列さ
れていたあの足跡は
ぼくが子どもの頃
うっかりつけてしまったのではなかったか

不在のものへ

横沢 義夫

鈴懸の暗れで
おおはんごん草が　あかるかった
如何にも秋風に揺れていた
農家の庭の西隅だった
谿に下りる迫った畑ではまだ　黍が騒がしかった
チドリノキも
無数に矮さな実を下げた
松葉に似てふたまたに　もげて落ちた
葎がすべてかくした
シデの樹肌で
甲虫が難儀していた
寄ると　這って敵意をみせた
向かいの峡に
松蟬は氾濫していた
磧も流れが深かった
岩根は濡れて
撓る風があった
変わるはずもなかった
僅か五年
油照りが去ったにすぎない

さより

木津川 昭夫

深い紺の　あさの海の波間から
ときどき躍り上る　冷たい天才少女よ
柔らかく撓う細い軀は　白銀のように透き
通って見えるが

鋭い機智と多感な夢をかくしている
にがい潮流にゆだねる　かもくな下顎の
運命に逆らう紅い棘に　荒い海は騒ぐ……
荒れる海の叫喚と　みどりの深淵の上に
淡い虹のように群れて漂い
彼女らは　清い結婚と静かな死を待って
いる
彼女らの澄み切った生殖機能よ——
その産卵は　盲目の黒い海草に灯りを点す
だろうか？

僕はいつも独り

園　育

ひらかれた窓に
広がるは
枯れ野に遊ぶ
一頭の栗毛
地に陽は落ち
藍はひたひたと迫り
硝子にさえぎられた時
少女は光を放つ
静寂の中で
僕はいつも独り

初恋

萩原 康吉

いつの間にか通ってしまった
通り過ぎた後だから
もう口にできない
せりのようなもの
なずなのようなもの
たんぽぽのようなもの
空をあおぐよりも
うつむく方が美徳だった
川のとりこになって
なりきれずに
土手の上ばかりをさまよっていた
せみのようなもの
とんぼのようなもの
押し花のようなもの
通り過ぎた後だから
もう追うことができない
しゅう雨のようにこみあげてきて
潮のように引いて行った
残ったものはさざ浪のようなもの
陽のあたり具合で
宝石よりもきらめく
あのさざ浪のようなもの
生垣を曲った時
ふいにであうかもしれない
幼な友達のようなもの

小鳥は消えて

孤源 和之

虫のように
小鳥は消えた
白い秋雲の中に
けれども　やがて
光って
落ちて来るだろう
このだあれもいない草原に
小鳥は小鳥みずからの重みで
小鳥は消えて
ひとりぼくだけが

なんにもいない空を
見あげて
考えている
寒い寒い秋の日よ

わかれのとき

舟山逸子

線路を隔てた
向こう側のホームで
その隔たりほどの
白い微笑があった。

青白い夜の光に　照らされた
あなたの姿は
そのまま　闇の中に
スタスタ入って行きそうだ。

——さようなら
　私たちの別れは
　これから　長い

暖かい部屋で　今しがたまで
一緒に聴いた音楽の名残りが
既に　遠い想い出のように
心に　響いてくる
わけもった親しさの時が
色彩を　帯び始める。

明るく光を放って
私たちを引き離した
電車の中で
風に晒された目を　閉じると
熱く潤すものがあった。
そして　それは
白いおもかげをなぞりながら
深く　静かに　落ちて来るのだった。

少年期

徳永伸助

I

土蔵と土蔵にはさまれた
狭くしめっぽい場所
鳥の鉄鉋がひょろひょろとのび
先端に水色をこぼしていた
あの息苦しい空間に救いを求めて
今でも内気な少年がいるのだろうか？

II

青大将の頭を石でくだき
両足をふんばり
こめる力に両腕をけいれんさせ
皮をひんむいて
村の児童であることを証明してみせたとき
あの少女はなんと悲しくぼくを見つめていたことだったろう！

僕はもう

池上和子

夢踊る　紺碧の空の下
何をしているのだろうか
故里の　あなたよ
僕はもう疲れました
孤り　雲たれた荒野を歩むことに

悲しいのです　虚しいのです
体中が　寂しいのです
なつかしい　あなたよ
僕はすっかり忘れました
人間ゆえに泣き　人間ゆえに笑うことを

偽りのない　自由の天地を
僕はただ　君とふたり
銀色の　ペガサスに乗って
ひた走る夢を　こころに
もう僕は帰ろう
凍てついた　この北国の憂から

とき・どき

霜鳥和恵

きょうは
晴れ時々曇りだそうです

それを　はぐらかし
そっぽを向き〳〵すねてみせるのが
あなたのいつもの手です

—いけません　そんなことでは——
叱ってみせたり　すかしてみせても
気まぐれの生まれつきは
なおりそうにもありません

時々雨
時々晴れ
その可愛いそぶりに
ついついだまされて
しまうのです

唄

谷田頼子

木よ
緑色のスピリットを
天に昇らせている　木よ
同じように　燃えているのに
私の茶色い心は
虫けらのように　地を這う

夕日よ
赤っぽい優しさで
あたりいちめんを包んで見せる　夕日よ
同じように　かなしいのに
私の涙は
誰をも　濡らしはしない

石ころよ
安心して重なり合っている　石ころよ
同じように　ごろごろしているのに
私はときどき
柔い寝台が欲しくなる

四角く　四角く
人間は　瘡蓋を殖し
鳳仙花のはなびらは
或る日　何気なく　土に零れる

消えた風景

市川敏幸

風のつよい日だった
顔にピシピシと砂の打ちつける中を
俺達は怒ったように歩いていた

ふいに　噛み殺していた言葉が
歯をつき破って
白けた風景のなかを
いつまでも鳴り響いていた

音の消えた後には
もう友は見えなかった
自分は砂丘に腰をおろして

友の来るのを待っていた
しかし　待っても待っても友はやって来
　なかった
自分は又　風に向かって歩き始めていた
風景は砂のなかに消えてしまった

みずうみ

矢野　敏行

湖水に透明な風が立ち
僕らの姿は消されていった
あの光る風　あの光る樹々……
僕らはやがて形をなくした
溶けていったのだ　光の中へ
青さのままに　悔いを残して
過ぎていったのだ　もう
湖水の風は空々しい――
僕らはじっと見つめている　今も
岸辺に鳥が渡るのを
樹々の葉うらが　ざわめくのを
しかしふたたび――ふたつの影は
湖水に映ることはない
ひとつの夢に　逢うこともない……

公園で

きの　あきら

樹は影の形を思案しながら
黙ってうつむいている
人はふと立ち止まっては
思い出すために腰をかける
樹も人もひとしく空から遠く
そして空は沈黙している
わずかに鳥たちが
時おり舞い上がっては
空への反逆を試みている

パノラマの道

高橋　正夫

お伽噺の中の羊毛のような雲が
太陽に抱かれて涙するあたり
雲雀達が婚礼の歌をうたっている
堤の上にはるは薄緑の新しい生を
播き散らして微笑む
ゆっくりと……
河の青さに姿を映つして
二羽の白鷺が流れるように
水脈に添って　はるかに　何処までも
野茨を越える蝶は媚びるばかり
これら静かな田園のうちに
しろい輝きに満ちた畦の道
走るものは　幼い少女
追うものは　真黒な小犬
馬に巻かれた縄をすべらせ
歩むものは　老女（おうな）
まえを行く鞠毬のような
少女と小犬を見詰めながら
……何を想ったこと　か
風が吹く　と　少女がころんだ

子規居士の辞世句

阿部　英雄

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をととひのへちまの水も取らざりき

正岡子規は明治三十五年九月十九日未明、壮年にして死んでいる。この辞世句は十八日午前に書いていて、咄嗟の作か幾分胸中に出来上っていたものか不明である。

今この真筆を観るに、居士はまず紙箋の真中に三行で堂々と「糸瓜咲て」を書いた。私はこの句の「仏かな」に注目したい。これは仏徒の言う浄土に旅立つ仏ではなく、「痰」のつまるのに今も苦しんでいる人間そのもの、「病牀六尺」を読むまでもなく生死の中に瞬時と言えど生き続くいのちを仏と指したのである。しかも「仏」の字は書体中大字で濃い筆蹟をとどめ、この紙箋を見るものの目に最初の印象を強くひかずにはおかない。

次に左側に「痰一斗」の句を見る。「仰臥漫録」でも知る如く、その苦しみ、ひと思いに痰の一斗も吐き切ってせいせいとしてみたかったのであろう。三句目の「をととひの」は右側に非常に不自然な傾き方で書かれている。前二句は「仏」「痰一斗」と多少の技巧がうかがわれるところから、死期近きを知った数日前からこの句の構想は温めてあったかも知れない。私はこのようにこの二句を観察する時、最も身近かに子規の体温を感じ親しさ胸にこみ上げるものがある。

さてその二句に引き替え「をととひの」は、その書き振り詠み方と言い、その時その場の即物詩と思われる。如何にも自然諷詠であって衒うところが微塵もない。しかしこの俳句には子規の余命幾許もない中に、その全生涯を通じて明治文学の詩歌をして改革して止まなかった気魄が込められている。「へちまの水も取ら」なかった過去形の詠法は、「へちまの水も取」れなかった現在形の詠嘆であり、今にして日本の詩歌の道の一層前進して止まぬことを、厳しくも静かに訴えているのである。（会員）

草雨亭

田中　冬二

草雨亭（そうとてい）とは私の家の雅名である。名前だけは洒落ているが、家そのものは甚だ粗末な陋屋である。気のきいた家へはいりたくても、資力がないのだから致し方ない。そんなことからせめて好き勝手な名をつけたりして、痩せ我慢をしているのである。その草雨亭は中央線沿いの日野市豊田にある。私が豊田に住みついたのは二十五年程前だが、当時の豊田は桑畑と麦畑水田の草深い田舎だった。八十八夜のころになると蛙の声がしきりにきこえるし、六月の田植時の宵には、螢が庭先の軒端にかけ渡した夕顔棚にとんで来たりした。その螢についておもしろい思い出がある。

それはもう二十年も前のことだが、草雨亭は東京都内の各銀行の俳句同好の人十三四名を迎え句筵を催した。たまたま螢の時季だったので、私の家では家内が近くの荒物屋で螢狩用に竹箒を数本買い求めて用意したりした。句会もすみ軽い夕食をしているうちに暗くなった。そこで私は一行を私の家から近くの坂道を下ったところの小川べりに案内した。小川べりは真暗で僅かに川水だけがうすあかりをしていた。螢は予期したようにいなかった。やっと小川の対岸の草むらに一つ二つ明滅しているのを見つけたくらいのものだった。そのときどぶんという音がした。誰かが小川へおちこんだのだ。暗いので誰だかわからなかったが、あとでそれはM銀行の人であることがわかった。腰から下がズブ濡れである。私はその人を伴って草雨亭へ戻ると、濡れた

ズボンを脱がせ私のものを提供した。その人はそれを借用して帰って行った。その小川べりにいまでは螢などはまったく見られない。灌漑用の豊かな水の小川で家鴨が泳いでいたりした。――門川に家鴨あそべる遅日かな　の小川であった。このあたり春も酣になると菜種の花紫雲英（げんげ）の花が美しい。簾に山吹の花が咲きつつじの花が咲いて、蛙の声をきくころが豊田はいちばんよい季節だ。そして夕暮れどきの柿若葉と土蔵の白壁は何とも言えない。

さて草雨亭の古座敷には、「草雨亭」と書いた扁額がかかっている。武者小路実篤先生の書である。墨色は青墨を用いられたのだろう、あまり濃からず淡色である。草と雨の二字がすこし滲んでいる。ある訪客が扁額を仰いで――あの滲んでいるところは春雨の感じですね、と言ったがそれはまんざら世辞でなく、これ以上の讃辞はないと私も思っている。

（同人）

編集後記

◆「四季」隔月刊にともない毎号「四季別冊」を添付することになりました。この別冊は会員のものであると同時に会員と同人の交歓の場です。

◆ここに掲げられた詩作品は入選作です。選考は従来と変わりません。ひきつづき神保光太郎が担当しました。次回からは神保と田中冬二が選考します。入選作品二十九篇のなかから二篇、推薦作として「四季」に掲載しました。入選作はいずれも径庭ないため、いままで入選回数の最も多い邨田、熊沢両氏の作品を推薦としました。

◆「四季別冊」あて、ご希望ご意見など、会員の声をお寄せ下さい。また紙幅の許すかぎり会員間の連絡の便にも供したいと思います。

◆去る三月下旬、箱根強羅に丸山、神保、田中（冬）、大木、野田、小山、塚山、室生八木が集まり、今後の編集方針と「四季賞」の設定について協議、内定しました。近々広く発表します。

◆つぎの詩集、詩誌の恵送を得ました。謝意を表します。詩集　球形（相原美紗子）日常（江良亜来子）未青年（鈴木礼子）白い彫像（今岡弘）海の見える都市（片田芳子）みずの季（高橋重義）独標（津田晃）囁（茶川影之介）村のアルバム（堀内幸枝）幻燈画（菊池正）。詩文芸誌「文芸埼玉」「日本詩人」「文芸広場」「浜松詩人」「アルファ」「露青窓」「陸」「ぐるうぷあお」「貼絵」「響」「九州文学」「青宋」「エリア」「文芸界」等。

大木実詩集　潮流社版

冬の仕度

附・「マイナーポエット大木実」丸山薫
普及版八〇〇円
番号入り限定版二五〇部
一二〇〇円（奥附自筆朱墨署名）
＜四季会員に限り送料共＞
普・七〇〇円　限・一一〇〇円

阪本越郎遺稿詩集　潮流社版

未来の海へ

編纂解説・丸山薫村野四郎
飾絵・竹中郁　A5変型二三〇頁　本文二色刷りフランス装折箱入りペーパーナイフ付　番号入り限定四五〇部・三八〇〇円
＜四季会員に限り送料共＞
三五〇〇円

46. 6. 7.

四季別冊

（2）

第10号
昭和46年9月号

風土の生命感……伊藤桂一
丸山さん……大木　実
消息……山岸外史
会員の詩作品
私の詩観……杉浦正一

潮流社
東京都千代田区内幸町1ノ2ノ2大阪ビル
＜電話＞03―504―0478
＜振替＞東京91375
頒価100円　送料25円

四季の会で……

風土の生命感

伊藤桂一

今日は宮崎から同人の高森文夫さんがお見えになると聞いて、久しぶりでお目にかかるつもりでしたが、都合でこられないそうで残念です。

だいぶ前のことですが、高森さんとは、延岡の渡辺修三さんのところでお目にかかっています。渡辺さんは、人柄も穏やかで人情味があり、書かれる詩も平明で醇乎としている。いかにも水郷延岡が生んだ詩人、という気がします。渡辺さんは祝子（ほうり）川渓谷を見下ろす素晴らしく景色のよいところに茶畑をもっていて、茶摘みの人と一緒に働きながら、お茶の商売をしているのです。

私は、いつか渡辺さんに詩を贈ったが、その一節に次のように歌っています。

そのひとは川のほとりに住み
日に一度流れを溯って
丘の上の茶畑で茶の思想について考える
そのひとはだから茶の木と水の匂いのほかなにもなく
枯れながら半ばは天の紺青に融けはじめている

その渡辺さんのところで、高森さんとお会いしたのです。「四季」で高森さんの所在がわかって、以前の「四季」の同人だからというわけで、「四季」の同人になられたのは、それよりあとですから、ぼくがお会いしたのは、だいぶ前のことだったのです。ところで、今年の六月、私が宮崎へ取材に出向いたとき、こんどは高森さんのいられる近所まで行きました。ちょっと、若山牧水の生家をみたかったからです。宮崎県が生んだ文人の中では、若山牧水が代表的ですが、その生地の東郷町坪谷へは、美々津から耳川渓谷をずっと登って行きます。美々津は、神武天皇が御東征のときに船出された港で、いまも「お舟出だんご」という、うまいとも、まずいともつかぬ不思議なだんごを名物として売っている古ぼけたいい町です。耳川沿いに登る道は進むにしたがって、しだいに景色がよくなります。

宮崎は渓谷美の地で、さきほども渡辺さんの祝子川渓谷に触れたが、この耳川も、うっとりするようなところが多く、風景に酔わされる、という意味では、申しぶんがないのです。東郷町の山陰（や

まげ）まで十五キロある。そこで、「高森さんという人が、この町の教育長をしているのだが……」と、食料品屋のおやじさんに聞くと、「高森さんなら、朝いたけどな。道で会ったよ。だけど、学校に行っちゃったんじゃないかな」と、電話をかけてくれました。するとやはり、高森さんは、学校に視察に行っていました。前もって連絡しておけばよかったのに、短い日程で、あちこち回っているので、予定が立たず、結局、高森さんには会えずじまいでした。高森さんがいれば、若山牧水の生家のことについても、いろいろ便宜をはかってもらえたと思うのだが、しかたがありません。

耳川――というのは、日向の河川みなそうですが、この川も水量ゆたかで川の曲折ものどかで美しく、山峡の趣も変幻に富んでいます。はるばると日向路をたどっている、という感慨が身にしみます。そうして牧水の歌の「幾山河越え去りゆかば……」の詩情の真髄に触れてゆく、最初の手がかりが、この耳川渓谷にある、と私は思ったのです。

文学散歩の面白さは、その風土からなぜその文人が生まれたか――という歴史的必然を、その地の、地勢、気候、風物、伝統、人情その他からさぐってゆくことですが、この坪谷の牧水の生地も、一見の価値があります。露風の竜野、啄木の渋民、犀星の金沢等にくらべて劣らぬ、意味と奥行を感じます。

もともと日向は、文芸のためには、もっとも恵まれた土壌をもっているのですが、その風土が生んだ文人が、とくに傑出して中央を圧したかどうか、ということになると、牧水を除いては、だれもみな日向的保守性に就きすぎてしまったようです。欝勃とした野心を他に向けて遂げず、内に向けて静かにそそぐ、という生き方を愛したようだし、自然、野心もまた、周囲の風物に向けて還元されていったのかもしれません。それがあるいは、古代的な文学精神の在りどころなのかしれないが、ひとり牧水はこの羈絆を脱して、足の及ぶ限りの山河を踏破して、自身の資性を大きく磨いたのです。

山陰の町は、耳川の清流に沿って細長くつづき、対岸の冠岳の突兀とした嶺は、ひときわ天を劃して異景ですが、坪谷へは、町はずれから橋を渡って西へ向かいます。ここから先も、さらに渓谷美が深まります。そうして、

おもいやるかのうす青き峡のおくにわれのうまれし朝のさびしさ

と牧水の詠んだ、その生地にいたるのです。牧水は少年時代を偲んだ『おもひでの記』の中で、自身の生地をつぎのように述べています。

「私の生れた村……は、山と山との間に挟まれた細長い峡谷である。ことに南には附近第一の高山である尾鈴山がけはしい断崖面を露はして眼上に聳えてゐるので、一層峡谷らしい感じを与へてゐる。……家は村を貫通する唯一の道路に沿ひ、真下に渓に臨んでゐる。そして恰度その渓は其処まで長い滝の様になって落ちて来た長い長い瀬が、急に其処で屈折して居るために其処だけ豊かな淵となり、やがてまた瀬となって下に走り、斜め右と左とに末遠くその上下の渓を展望することが出来る地位にある。」

この文章にある牧水の生家は、昔としてはめずらしい瓦葺きで、それがそのまま残っています。二階建で、家の正面にセンダンの大樹があり、私の行ったとき、この樹にはこまかな花がたくさんついていました。昔からあったセンダンです。このセンダンの花や蕓越しに、たぶん、牧水の文章にあるのとほとんどかわらない風景が、パノラマのようにみえるのです。

生家の近くの山際に「牧水記念館」があって、これは瀟洒で、しかも古雅な趣を失わぬ建物ですが、陳列品のうち、作歌ノオトの、苦心の添削のあとのみえたりするのなどは、身近にこの歌人の息づかいを感じさせてくれます。馬籠の「藤村記念館」で藤村の『夜明け前』の生原稿をみたとき、実に丁寧な楷書で、私はこのときも心をうたれました。精魂のこめ方に対する感銘です。

この記念館の裏山に、大自然石に彫り込んだ歌碑があり、歌は、歌集『みなかみ』の巻頭歌、

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり

です。歌碑のところから、裏山へ山道をたどっていると、子供らの歌声がきこえて、おや？　と思ったのですが、じきに学校がみえました。山のすぐ下が学校で、生徒が歌っていたのですが、この学校の生徒の中にも、牧水の卵はいるのかもしれない、と思ったことです。以前、柳川で、白秋碑に見入っていたとき、岸に柳の植えてある堀一つ隔てて学校があり、子供らの歌う声をきき、この学校から詩人の生まれないはずはない、と思ったことがありますが、牧水のときも、それに似た感慨でした。

牧水を生んだ生家のあたりの環境は、風土と詩人がいかによき密着をしているものであるかを、無言に教えてくれました。詩人もまた草木のように、風土から生まれ育つものです。ここ一、二年、私は、なにかの取材ついでに、かなりの文学散歩もしたのですが、詩人や歌人の生まれる風土性、風土のもっている生命感、といったものに、改めて興味を覚えたのです。風土が、実に長い時間をかけて、ひとりの文人を生むための営みをつづけていること、そのことに、いいがたい、神秘――といいたいものをうけとった次第です。

（同人）

丸山さん

大木実

丸山さんは僕を「おおぎ君」と呼ぶ。昔からそうであったし、いまもそうである。他のひとからは「おおぎ君」と呼ばれることがない。「おおき君」であり、「おおきさん」である。

僕が「おおぎ君」と呼ばれるのは、どうやら丸山さんだけからしいが、ゆったりとしたおだやかな口調で、丸山さんにそう呼ばれると、僕は「おおき君」でもなく「おおきさん」でもなく、どうしても「おおぎ君」でなければならない気持がする。

ところで、丸山さんの詩の持つリアリティは、いつも見事である。どっしりとして確かで、丸山さんが詩でみせるリアリティこそ、まぎれのない実在であって、丸山さんの詩を読んだあと、僕らの現実の方がかえってこしらえものじみて、色あせてみえるからふしぎである。

（同人）

大木実詩集

冬の仕度

潮流社版

附・「マイナーポエット大木実」丸山薫

普及版八〇〇円　番号入限定版二五〇部

一二〇〇円（奥附自筆朱墨署名）

＜四季会員に限り送料共＞普・七〇〇円　限・一一〇〇円

大木実の詩はいつも日常瑣細なことを題材に、具体的表現の中に、読後をしみじみさせる、と誰もがいう。しみじみということを正しくいうなら、感傷の中にただ流れて消えるものばかりでなく、人間のくらしや人生の味をしばらく嚙みしめさせるものがあるという意味になるだろう…。

＜丸山薫・跋文より＞

消息

山岸外史

近頃の私は、まったく「酒」に弱くなった。酒量の方はおちないようだが、肉体の方がいわば落ちてきているのである。さすがの私もつとめて「酒」を控え目にして、摂生を考えているのだが、それでも依然として脱線することがある。家人に聞くと、今年は成績がいいそうだが、一昨年から昨年にかけては成績最悪の季節で、結構、パトカアの厄介になること五回に及んだりした。苦悩があったせいだと思うが、酔っている間に冬の海がみたくなって、小田原の海辺で眠ったり、わるいタクシイの運転手に抱きおろされて、冬の路次で前後不覚の睡眠をとったりしたためである。居住地では要慎しているのだが、それでもわが家ちかくのそれも精神病院の草地に寝込んだりして、やはりパトカアの厄介になったりしたこともある。その病院に入れられなかったのは、たしかに私の「精神が健在だった」証拠だと思っている。むろんこうしたことは不始末であって、立派なことではないというきわめて厳格な批判力もあるのだが、そこがやはり「酒」のなせる神業である。神技である。しかし不思議なことに肉体おとろえて、泥酔の極、それから批判力の極に達すると、かえって精神力が旺盛になり、文章がよくなってくるという極上の原理のあることも発見している。つまり全肉体のかわりに精神だけが残ってくるせいではなかろうかと思っている。精神の神だけが残るらしい。年齢のせいもあるのだろうが、裏も表もなく、ますます正直になろうという意慾が高まっているせいもあるかも知れない。「文は人なり」の方針堅持も、ますます旺盛である。徹底して生きたいと思っている。一部で軽侮する人もいるようだが、なんの問題は仕事なのであって、それが完成しさえすれば、文句はなくなるものと確信している。私は仕事の鬼になりたいと思っているのだ。とにかく仕事には熱心に励んでいるし、一日一日と自覚も深めているのだから、あとは出来るかぎり長生きすることだと思っている。——尤も「酒」への要慎も次第に深まってきているから、この勝負どころをはづすこともあるまいと判定しているのだが、とにかく「これはひとつの限界の時間であり」「新世界めがけての突入の時間」でもあるのである。

詩人はつねにこうして、勝手なことを言うものなのだ。（同人）

詩人伊東静雄

小高根二郎著

〈新潮選書〉新潮社
定価五五〇円

今日、伊東静雄の人と作品を正しく語る人として、小高根二郎氏に並ぶ者はないだろう。新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。

〈井上靖〉

会員の作品

彷徨

鳥羽貞子

逃げてきて、また戻っていく。
時間の外へ、はみ出たわたし。
たんぽぽの棉毛が飛んでいく。
石垣のすみれは、うずくまって、
強風のすぎるのを待つ。

見えぬ膜のむこうを、
追いつめて、
手を伸ばし、
わたしは、なにを、あせっているのだろう。

隅田川の辺りで

池之上篤

広い河のうえに
腐りかけた木っ端がながれていた
河の下流に
旧い橋が架かっていた

灰色の剝げた橋桁にもたれ
真赤なコートを着た　金魚のような
女の子が
黒い河をみつめていた
哀しいほど白く　風に吹かれ
ひと群れの水鳥が汚れた水を啄んでいた

橋の下を
ゆっくりと泥色の達磨船が過ぎていった
鈍い河面に
陰気な水脈が
皺のようにひろがっていった
河の上流の
もう一つ　錆びた長い鉄橋のうえを
田舎に向って
おれんじいろの電車が走っていった

河の岸を
こんくりーとの厚い壁が　どこまでも
どこまでも続いていた
わずかばかり雑草が残る
岸壁の下の方で
子供がひとり　小さな頸を振りながら
松ぼっくりのような顔をしかめて
泣いていた

「美しい時はもう訪れはしないだろう」
誰かが　河の辺りで
虚しい言葉をのみこんでいた

うすら日の
深い秋の午後のひかりが
どんよりと茶色い街を照らしていた

私は一本の木

立花幸子

私は一本の木
とんで来る小鳥に
小さな枝を　かすことはできても
小鳥を
とらえることはできない

私は一本の木
吹いて来る風を
うけとめることはできても
風を
追っては行けない

褐色の樹皮の下

白くやわらかな肉を持つ
みたされ
かもされ
ほとばしり
青いしぶきで
大地を染める
事を願う
私は一本の木

まわりのざわめきに
耳傾けながら
空高く
伸びる事を願う
私は一本の木

子には子の

高畑 敏光

みかんのかわが
剥けないので
子供は
くしゃくしゃの顔をして
がんばっている
涙がひとつころりと落ちた

時計

坂本 俊雄

時の流れが途絶えた時
静まり返った部屋の中には
もの音ひとつ 無かった

月日の流れは それを気付かなかった者ら
を
とり残し とり残された者らは
過ぎた月日を確かめようと
指おり数える あの月日の中に自分は居た
と

何も為さなかった日々が
思い出も残さなかった日々が 私の日々と
日々は停まらず 誰の日々も流れていった
と

知らぬ間に過ぎていった歳月が どれだけ
かを
人は数えることは出来るが 誰もその重さ
を計ることは出来ない
私のやって来た遠く長い道のりを 振り返
り 私は見つめている
止った時計の 動かない振り子を いつま
でも

秋

内田 幸雄

確かに居るのです
そっと忍び寄って顔をあげると
すばやく鶏頭の花に化けてしまうのです
風に揺れているのです

鉄のように光った水と
草たちの葬列です

背後で不意に石が割れて倒れました
草の根の赤いのは
割れ目にあたった西日の反射です

これは

こおろぎの喰いかけた雀のかたびら

夕暮は
鶏たちを小舎へ追い込んでしまうと
味噌汁を煮る女の傍に
そっとうずくまるのです

確かに居るのです
庭の方にそんな気配がします

しぐれる京都

鈴木 たけし

大路には しぐれのあとが さうして
人形がひとつ そこに
かたはらに 濡れてゐた……

忘れられて人形は
行人の今日の愁ひにふさはしく
古びたけれど つつましきかたちに
ゆくりなく ひとを憶ふ

十年前の 古都をわたしの初旅に
これか 西の京の〝広ォい通り〟を教へ
てくれた
ゆきずりの かなしきひとは
はにかみながら やがて
通りを向うに消えていった
そのさきは 想ってみても
消息も 名もさへ知らに 昔のひとは
誰に尋ねるべうもない

葵のはな べにばな うどんげのはな
その夜 小さな宿のうらてには
ひとすぢ 螢 涼しかったが

あれからのわたしは今日まで
何をいったい しただらう
をりをりは そこばく本を読み
時に及んで ものなど書いて 中頃は
わびしらに 深酒の宵宵も 数へた
それよりほかに
いったい何をしただらう
遠遠し かへりみる日日とては
やっぱりむなしいことばかり

さうして冬が来て
にび色の冬に来て
あてもなく 嵯峨野のわたり
さび しをり 口ごもりつつ
行きくれて もどるこころに
ひとしきり またしぐれふる
つつましきものにふる
行人の肩にふる
しのしのと ふる

小さな宿の昔よ
ほたる
狂ひ燈ともせ
ほたる

追想

新倉 真知子

てまりをついていたのは
鼻たれ小僧の私ではなく
美しい大和人形でした

枯木色をしたイモ虫は
なつかしい友人です
夕風に吹かれて

ブランコにのっていた私に
調子を合わせた
ほほえましい友情が
ぽつん……と
夕焼けの中に　立っています

坂道をころがってゆくてまりを
追いかけて行く　悲しい心は
香ぐわしい大和人形ではなく
膝こぞをすりむいた
この私でした

今日の朝

日夏　菫路

埃っぽい北風の吹く日
まずしい町の狭い商店街で
朝からはやっているのは異邦人の営業する
　コーヒー店ばかり
まったくさみしい風体で
けれども異邦人たちはげらげらとわらって
　いる
抱かれた子供までわらっている
サービスの玉子が足りないといって大声を
　たてる
ああ　ぼくも毎朝その片隅で
しかしなんと寝足りない顔をかかえている
　のだろう

微かににんにくの香り
烈しい話になると彼らの祖国語が飛交い
ときにはめそめそとぼくたちをののしるも
　のもいる
今日もまたあてどないこころを引摺って
ついに彼らと交れないまま　ぼくは
暖房機から流れる風になびく造花と
淡いシャンデリヤの輝きと
そして彼らの体臭とにとり囲まれて
病者の如く今日の朝を見送る
けれどもぼくには恢復すべき病巣がないか
　ら
夢の風船をふくらませることも出来ない
瞳だまばかり澄んでしまって
がらんどうのこころのなかに呪文のように
　流れ込む
声や匂い、なまぬるい風なぞ一切のものに
むしろ幸福を探しはじめる
ああ　この漠然たる幸福！

誰に語りつくせるてだてもないが
この小さなひとつの気分が
日々の生活に拉致されるこころを支えて来
　た
そうしてぼくはまたそそくさと席をたって
乾からびた街路の人格者となる
風を受けただけで翔立つ蝶のように

花

尾世川　正明

今、私の家の庭には、(豆科の植物、何
という名だろう?) 細かな薄桃色の花弁が
群れて咲き広がっている。私のほかには、
誰も見る人もないのに、何という繁栄だろ
う!

もっとも、毎朝きまって九時頃、一匹の
あぶがやってきて、蜜を運んではゆくのだ
が、それを数に入れても、ひとりの人間と
一匹のあぶの為に、こんなにも花々は豊か
なのだ。

豊かすぎる花々の香を、胸いっぱいに吸
い込む度に、私は何故か淋しくなる。そし
て、私とあぶとの為に咲いてくれた花達を
思うと、私はその前に佇んで、日がな、じ
っと眺めていてやるしかないのだ。

猪

萩原　康吉

猪について
僕は何も知らない
まして見たこともない
これもほんとうかどうかはわからないが
「まっしぐらに突進する」という
誰の頭にもあるイメージ
僕もまたこれしか知らない
だがなぜかしら親しみを感じる
もしも雪のうっすらとかかった尾根を
何とも見わけられぬほどの速さで
駆けるのを見たらどうか
或いは人跡絶えた日暮の村里で
たった一匹
じっと何かを見つめている目があったらど
　うか
傷ついた猪
仲間と楽しむでもなく
畑を荒らすでもなく
しかも燃えるような思いを秘めて
普段は静かに歩む猪
僕は猪が好きだ
まだ見たこともない猪
恐らく不器量であろう姿
かたい毛
体に似合わぬ優しい瞳
たとえ僕の想像が違っていたとしても
山中深く住む
孤独なたくましい猪が好きだ

雨の夜の訣れ

油谷　広

雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
テールランプの真赤な色が、
濡れた舗道に溶けて流れた
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
自動車(くるま)のなかの君が姿の見えぬまゝ
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
……
私は、独りで濡れてゐた——
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
雨、雨、雨、雨、雨、雨、雨
……

朝

椎葉　朝一郎

或る朝
水脈の絶えた河沿いに
やがて、白い砂丘に
やって来たのだが
波濤の群が、鉛色に
肩を揺するだけで
憂欝な帆影さへ、
見えはしなかったよ
夜光蟲の墓標ででもあらふか
難破船の操縦舵が
冷え冷えと輝やき

かたわらに
薔薇が一輪
固い面持で咲いてゐたよ

乾いた砂岩の
崩れては流れる傾斜地に
或る朝
薔薇が一輪
固い面持で咲いてゐたよ

食品街

谷田 頼子

歩く歩く歩く歩く歩く歩く
すれ違うすれ違うすれ違う
すれすれすれすれすれすれ
立ち止まる
立ち止まる
立ち止まる
立ち止まる
立ち止まる
行列する行列する行列する行列する行列する
る行列する

不思議にも　硬皮(キチイン)を着ていないで
色とりどりの服を着ている

清冽な天体に向って
巨大な火の花を咲かせる
人間の営為があり
アミーバの分裂のような
熾んな
這いまわる　このアニマリズムがあり
……永遠の過渡期の中で

花

田中 建市

白い室内に滲んだような薄い水色の花がさ
　してある

花は室内を分けるように細くのび
たがいに助け合うかのように茎をからませ
　ながら咲いている

その花は早すぎる死をむかえる青白く病ん
だ少女を結晶させたようだ
数本の花たちは静かに真理を描いている

路

八木沢 幸子

一本のベルトを
私は歩いてゆく
薄明るい空間に白く曲がりくねって
どの次元へともわからず延びている路
行く手には星々
石ころみたいな星々

もう一本のベルトを
あなたはまっすぐ歩いてゆく
今　私の路に折り重なって
じきに消えようとしている路
星々の向こうに
石ころみたいな星々の向こうに

星のかけらたちが
静かな旋律になって
青色にさざめいてゆく

しずくが落ちて
灰色の砂塵に溶けた

私はあなたを見詰め
あなたは前を窮て
この瞬間はおしまいになる
そして透明な扉を押して
進んでゆく

内緒話

大沼 功

走りゆく夏雲が　青空に残す影は何なので
　しょう
青空に向かって　小さな可愛らしい花がそ
　う自分に語りかけました。
可愛らしいその花びらを空に向けて
しめやかな夏草のしとねの中に
ものうく感ずるのは　初夏だからでしょう
　か？
でも……そう
そっとしておいてあげましょう
小さな花はこわれやすいから
乙女の心のように
ちょっとさわるだけで崩れおちてしまいそ
　うだから
私はただその花をじっと見つめるだけ。
いたいけな心をもったその花のかよわそう
　な美しさが好きだから
そっとしておきたいのです。
きっと　その花が太陽に向かって花びらを
　ひらくときが来るでしょうから
そのときの楽しみにとっておきたいので
す。
でも……
太陽は真赤な足跡を残して去って行く
なにもかも去って行く
これからどうしたらいいのかしら？
どこへ流れつくのかしら
ひとりぼっちで……

いたいけな小さな花は　海原に
ひとりぼんやり　佇ずんでいる
悲しげに涙を流し　砂原をみつめている
じっとしていればいいの
ただじっと君の可愛い花びらを
しずかに波にまかせていればいいのです。
そのうちにきっと　小さなボートが流れる
君をみつけるでしょう
きれいな花をみつけた彼は　静かにその手
　をさしのべて
水にしめった君の花びらをすくい
君のさわやかな香をかぐでしょう
そして　花びらといっしょに
大空に向かって笑いかけるでしょう。
君の微笑が僕のものでなくとも　それがた
　のしいのです。
あの大空の中に　走る雲を追うあの微笑み
　が！

夏の空はどこまでも青く　高く
なにものもすいこんでしまいそう。
そこに浮かぶ白雲は　私の心を乗せてどこ
　かへ運んで行くの
夏の海は　太陽の光をうけてギラギラ輝い
　ている
その上に来た雲は　私の心をもはや乗せて
　おいてはくれない
あの大きな広い海原に私の心を残して
一人でどこかへ行ってしまった
叫びたくとも声がでない
その大海原に浮んでいるのがせいいっぱ

い。
砂原では楽しそうな声が満ちている
これからどうしたらいいのか——
心細くて　さびしくて　涙がこぼれそう

遠い日

圓子哲雄

ぼくの声変りは十七歳だった
港町の船の良く見える坂道だった
汽笛の間から
ぼくの声がしていた

理由

依田仁美

じっと休んで
その目は　空を見ていた
動きたくなさそうに
頬の色は　いつもと変らないのに
動きたくなさそうだった

ボールが高々と打ち上げられて
キラキラ光り
僕らの同世代は歓声をあげていたのに
空の　なやましい青さ
（十七歳）
二人は　それを
少し離れて　見ていた
別々の理由で——

少年によせる

森真紀

沈んだ帆船のようにしらしらと熱めいてゆく少年よ
あなたの仄じろくのばすあしのさきから
夕暮れが
青い波紋となってひろがる—
はるか昔の
みしらない国のうすみどりのざわめきを秘めたあなたのしづかな体液が
そのたびに
わたしの胸の辺にひたひたと打寄せては
わたしをしだいに優しく崩してゆく—

さやぎだした星たちは
このふたりだけの風景をしだいにみずうみの底にふかく沈めて—
少年よ　わたしはいまうれしげに聞いている
刺しあげているあれらの樹々のあざやかな悲しみを
花々をほんのりかこんでいるあかるみをそのほろびの気配を—
みしらない昔にしんだあなたにはもはやなにも聞こえないなにもみえないこの風景のなかで
だが　わたしは
あなたの仄かなぬくみをさぐりあてる
この世がきえうせたら—
みしらない少年よ
わたしとあなたとこの夕暮れだけが薄光る
ふしぎなあみいばあみたいになって
なにもかもなくなった闇を匂やかに漂よっていよう
そして　そのときこそふたりは

いまのふたりには内緒のあかるい風景をつくりあげて
睦まじくひとつの花の蜜をのんでいよう

夜明け

茶川影之介

槌の音
一点二点　聞こえてくる
布団を破って
布団を透って
聞こえてくる
槌の音
起きてみれば　もうすっかり朝
布団を蹴ってたたむ
ときめく心臓のひとときの戯れ
早速　カミソリ　洗面
そして　お茶ビンに湯を入れて
湧かす
あの子たちのために
あの少年たちのために
朝方　雪が降り積っていた
今は　乾いてなくなった　雪
かじかんだ指の

槌の音
一点二点
すべての夢魔を弾じいて
聞こえる
正午のあかるい日射しに
うららかに打つ一軒家
夜明け前の
槌の音

○

私は知らなかった
私はおびえていた
一坪の土地ほしさに
歩いていた　野ざらしの旅の野を
さげすまれ　あざけられ
わからないまま尋ねて
忘れはてていた人間を
ああ　人間の槌の音
一点二点三点　ひびいてくる耳に
しみとおる臓腑の魂に
ああ　忘れてはならないもの
それは築く
槌の音
かすかに　ああ　またかすかに

ひびく槌の音
寝耳に聞かせる槌の音
一点二点三点　ひびいてくる部屋に
かすかな仄明りに
御仏の慈悲を知る
塔のあでやかさを知る
さんざめく少年の　子の
槌の音
槌の音
私は知らなかった
私は始めて知って
めざめた　よろこびの音

○

槌の音
一点二点　滲みわたる
屋根づたい
とおい街にもひびいて
ひらめく柱
瓦屋根の丘
超ゆる槌の音
だれか旅をする
だれか墓に参らん
しづけさに聞く心音の槌の音

こおどり舞い　昇る
雲雀のつぶやき
レンゲの野面に
ひびく
一点二点三点　ひびく
槌の音
いざや　これから立ちあがり
いざや　これから働きつづける
柱立て
板目合はせて
釘打つ
槌の音
さんざめく槌の影
夜明けの光

富士

清水和明

ハイウェイがつづき
おっと現われる富士よ
富士はうすい霞の衣にくるまれて
ハイウェイを白亜の帯にする
真白な毛布の下で

夕べに死んだ人が横たわり
息をしている
かすかに死者が息をする頃
富士は黄金の輪郭をあざやかに
ぼくらの視界から退き
ハイウェイはしずかにつづく

運河

林英子

城を訪ねて
運河に出る
城は焼けたのか
無かったのか
暗緑色の水は動かぬ

曽て見た南の小さな入江
同じ水の色であった
あれは絵だった
併し　その南の海で
私は想っていたのだ
鉛色の北の海を—

暗緑色の水は動かぬ

これはまさしく運河だ
白っぽい通りも家並も—
城を求めて私はここに来たのだ
私は唯見たかった
俗化した公園のような城を
単なる形骸でしかない城を
併し　その中には
ひんやりした重苦しい空気が
ひそんでいる筈だった
城は無かった
運河だけがあった
暗緑色の水の色だけが—

波乗

黟木景

堕ちそうで
それで
なかなか墜ちないのだ

こうしている
と
なにかに偶う
大抵
快く
きららかに……

そう
おれは支えている
危うい
忽ちに壊れそうな
幽かな
白い
一線を

街路伝いの
枯木の底を
素知らぬ風が
吹いて
こんなささいな些事で
存在を慥める
危うい
奇しい
一線

時折
暗い深淵の中で
アメーバたちの
じめじめ
犇く呻きが
聴こえてくるようで
そのたびに
ぞっとする

朝

天野中道

朝、なんと明るい朝なんだろう
まぶしいほど明るい朝なんだろう
山も川も野も町も新しさでいっぱいだ

朝、なんとさわやかな朝なんだろう
身を切るような凍てついた大地に
明るい暖かい太陽がさしこむ
小鳥のさえずりがしじまを破る

朝、なんときびしい朝なんだろう
その厳しい寒さをついて梅の蕾がほころぶ
花びんに生けた梅に朝日がさして

ほのかなかおりがただよう

朝、なんとまぶしい朝なんだろう
暗い人生の氷雨にぬれた
人間の悲しい無明に迷った心に
まぶしい朝の光がさしこむ

朝、なんと清らかな朝なんだろう
十四歳のひとみのような汚れなき朝
人生の朝
私は、朝をこいねがい、朝が大好きだ

日日

小林重樹

そこなし沼に石をなげ込む
小さな波紋をのこして
石は
くらい水のなか時速マイナス三十キロの運
命をひたすらまっすぐに落下してゆく
おそらく
何のおうとうも
行きついたことさえも感じることはないだ
ろう

一個の石
こんな存在をこれからさき幾度なげ込むこ
とであろうか

私の子供に（自然のおいたち）

吉田 千鶴子

青空があまりにも大きすぎるので
神様は太陽をつくりました。
けれど太陽はひとりぼっちです
だから月をつくりました。
そして昼と夜を分けるために
太陽と月はじゃんけんしたのです。
太陽が勝ちました
そして太陽が朝から働くことになりまし
た。

地球にはたくさんの人間がいるのに
空には太陽がひとりぼっちです。
神様は雲をつくりました
それで太陽にはお友だちができました。
でも月はひとりぼっちです
神様は月にもお友だちをつくりました。
星です。
太陽と月は泣かなくなりました。
友だちといっしょで楽しいからです。
けれど今度は
太陽と月が遠すぎるので話すことができま
せん。
だから太陽は月に会いに行くのです
涙を流しながら。

「明日は太陽にとっても
私にとっても
楽しく笑える一日でありますように……」

雪

菅原 土ノ子

忘失の天涯へと
いってしまったはずの数限りない細瑾が
氷結の花飾りをつけ
十一月の末日だという日に
積る雪となって　やって来た。
ぶっくらした　虚飾の白肌——
大地に平伏して獻秡し
一切の罪過をとめどなく懺悔しつづける。
その　あまりなる一心に
全豹の傷悴はひどく
雪暗れの
血走った渇望の眼底を凍らした。
シロイ、しろい、白い、
真白い、落英……
全景は悔恨の雪花に覆いつくされていっ
た。
釘づけにしてしまう寒烈と
逃げだしたいパトス（激情）とが
さかんに乱舞するさなかで　私の思念は
雪糅の世界へと
滅多矢鱈なシュプール（ｓｐｕｒ）をえが
き滑べり下りていった。
小っちゃい　雪だるま——
いくつも　いくつもが
母親のあとを慕って必死に追っかけてい
く。
子供の、雪だるまの、本能の追憶が
見捨られることを知覚するのだ。

未練を追いかけ
思念を深くしていく自責のスキー
今——　白銀の世界は
空白の鬼薄に満たされ
私のスキーは逼迫な告白の文字を綴り初め
る。

離別

二階堂 雄次

去ってゆく　ひと
の後姿は　譬えば……
凩に散るポプラの葉のように
背中の辺りが　しっとり　雨に濡れている
漏れ出る　靄の如きひかりは
吐く息をも　時には　濛い峪に導く
あの方を　支えよう
として　離別があった
朽ちてゆく　彼方の自分を
いつしか彼は　組み立てようと　眼を閉じ
る
閉じるということは　現在を拒否すること
だ——
組み立てられた古城は　音をたてて毀れて
いかねばならなかった
繞っていた　ポプラの枯葉は
遠い追憶のように　彼の眼前を過って逝っ
た
愛のための
離別があった

私の詩観

杉浦 正一

蕪村の句に、「しら梅や誰むかしより垣の外」「妹が垣三味線草の花咲きぬ」「愁ひつつ岡にのぼれば花いばら」などというのがある。この三句を列挙したのは、この視線に作用している蕪村の心に、女性観女性像のイメージがうかがえるからである。

盲目の秋　Ⅳ　中原中也

せめて死の時には
あの女が私の上に胸を披いてくれるでせう
か。
その時は白粉をつけてゐてはいや、
その時は白粉をつけてゐてはいや。
ただ静かにその胸を披いて、
私の眼に輻射してゐて下さい。
何にも考へてくれてはいや、
たとへ私のために考へてくれるのでもい
や。

お浜さん　　土橋治重

ぼくはお浜さんを探しに行く
恋してから三十三年も待ったが
一度もぼくのところへ
やってきたことがない
ここ世田谷の若林町は柿がよく実り
熟れては青空と恋をする
そんな恋は何度も見
ぼくもこれまで数知れぬ恋をしたが
お浜さんへの恋は若草のみずみずしさ
栓をとると
ういういしい水がぱっと吹きあげる
その水に濡れて
ぼくは待ちきれなくなったのだ
ぼくは柿の赤い唇の下を通って

タバコ屋へ行く
タバコ屋の娘は二十七八のすらりとした独身
お浜さんではないかと思ったが
胸のあたりがうすすぎる
うすく淋しいのは
垣根にからんだ咲きおくれの朝顔
その垣根の中から
三十ぐらいの丸顔の女が出てくる
スカートの腰に挿した牡丹の花
朝顔から牡丹に移る造花の妙に
ぼくは眼を見張るが
子供二人連れているので
ながめがすっかりこわれてしまう
子供は可愛いいが
いつも景色をこわすから困るのだ
しかしこの人もお浜さんではない

夫唱　丸山豊

つぶらまなこの遺児をつれ　谷をわたり梨畠をぬけて青い電車にのって嫁いできた妻は　私のこめかみや膝小僧のあたりで　かすかに死が匂ふといふ　お前がうしなふたものと　しずかに訪れたものと　ふしぎにおなじ匂いがするといふ　そしてまた　お前の奥部からうひうひしい生命をとらへようとするこの胸も　死者さながらにつめたいと　お前の軟部から果実の声を聞き分けようとするこの唇も　冷酷なもので濡れてゐると　にもかかはらずお前ははげしく充たされると　二百十日がすぎたなら　私とお前とは子をつれて　レグホンで刺繍したお前の村へ行こう　そのとき骨のないあの骨箱に秋のぬくみがあるように　月夜には戦死した彼をくはへて　新しい影絵を組み立てよう

中也、土橋、丸山豊の詩など、いずれも女性を対象にうたったものであるが、なぜ、女性を扱ったものだけを取上げたかというと、じつは日本的なものを、日本人的なものを、特徴的に挙げたかったのだ。もっとも、日本的なものと言っても、女性を対象にあげなくともよかったのであるが、引例しやすい素材であると思ったので、とくに列挙してみたのである。

蕪村の俳句は、正しくは女性をうたった句とは言い得ないものである。郷愁というか、蕪村の全句を通じて顕著な里恋いの心を表白しているものであるが、日本的伝統ということ、そして女性像をということで遡ると、乏しい私の書棚の中からは、せいぜい蕪村の句を無理をして引用するしかなかったのである。けれども、これら三句から古きむかしの伝統的女性像のイメージは、仄かにうかがえるであろう。ここで蕪村の世から中也、土橋、丸山豊など、戦前派の詩人あたりまでは描写された女性像も平明な線描、あるいは淡彩で印象派風に提出されているのだが、これが戦中戦後派になると、

瞠視慾　長谷川竜生

女が、もうひとりの女に
腹痛と、排泄とを、訴えだした
訴えられた女は乗客に気をくばり
素知らぬ表情で、つめたくはねつけた。
青ざめた女は、全身かたく締めつけ
毛皮外套に、両手を
突っこんだまま、面を伏せた。

ふたつ目の駅が
さっと、女を通過した。
描き足してある目つぶり
赤い唇をいがめ、肩をふるはし
下痢の状態を喰いとめていた。
大腸の中の汚物が音を立てて膨らんだ。
　というふうに荒いタッチの、(ふたつ目の駅が　さっと女を通過した)というように残酷な解体的な(大腸の中の汚物が音を立てて膨らんだ)視線に変化し、
美奈子のために加代ちゃんは唄う　秋元潔

走ってけとばせ　あたしのいのち
あんたの息のからんだ髪を
もっと焦がして
あんたの誓いにさまよう指を
握りしめあって
あんたの夢に息づく胸を
もっと豊かに
あたしはもっとあんたが欲しいの
まぶたいっぱい溢れるばかり
とびちってまたこみあげるあんたがいっぱい

右のように分解した抽象的女性像となる。もう一作同人の作品をあげると、夜の記憶というのがある。

夜の記憶　秋元　潔

ふたりはすばらしい
あんたがいっぱいの夜
鍵穴には海があふれる
あたしは泳ぐ
抱き合ったまま魚のように
あたしたちの手はもういらない
うごめいてもういっぽんの手が食道から咽喉にこみあげてくる

こうなってくると、その表現法は、これまでの作者内部を高め、言語をきたえあげるといったような表現術とは、まったく様相が異なり、自在な奔放性がある。そして、破壊的エネルギイにみちている。いずれかというと、この作品も部分引用であるが、全体的には細片を撒布したような分散的手法であり、このへんの作品になると、もう作品中には日本の女のイメージではない、抽象的軟体生物のそれがあるだけである。このように戦後社会における価値観の崩壊は、既成の価値観の枠を蹴破り、既成のあらゆる制約を踏越え、統制を撤廃し、無尽に詩の領界においても変貌解体をみせ、詩壇においても日本人としての詩は片隅に、現代のおおよその詩は、無国籍者的な詩によって占められるにいたったのである。一九七〇年つまり昭和四十五年には女性像もまるで木製の人形のように表現されるようになる。次の引用作品は、私にとって理解不可能な表現法で発展されているので、わずかの部分で止めておく。

天沢退二郎

コの字に脚をひろげた女が
コの字形にカタンと転げて
字が一枚その上にかぶさると
ズイズイ……われらの噴水状の
頭のむれが坂の両側から出場する

こういった、いくら時間を費して読んでも判読できないような詩の作風が横行し、現代詩壇の本流であるかのように幅をきかし、そのような派風が蔓延し、流行の趣さえ呈していることは、喜ぶべき現象ではない。これらの詩の全体を占めている混沌性は、おおむねの人々が人間の根本を喪失していることの、詩の世界での表明として端的な現象であろうし、戦後二十五年を経た現在でも、戦後は決して終ってはいないということの心理的発現であり、詩の発現形

会員規定

一、会員は、会費半年分二千五百円を収めたものとする。会費は、「潮流社四季編集部」へ送付のこと。(振替東京九一三七五番)
一、会員には、隔月刊「四季」および「四季別冊」(毎号添付)を送付する。
一、会員には「四季」の主催する講演会、研究会に、そのつど案内状を発送し優待する。
一、会員は、潮流社発行の「四季」同人の出版物を特別価格で購買することができる。

式がこのようなまったく抽象的断片的表明様相をなしているのは、現代人が何ら精神的人間的基盤を持ち得ていず、まとまりのない歪み多い怪物的心理、状況でいることの証左でもあろう。このような解読困難な、いや解読不可能なほどの歪みをもった奇怪な詩の状況を、いかにも納得したふうをし、肯定したふうをしているのは、受入れるマスコミあるいは一般読者の側も、現代の脆弱な精神状況の不倖の末端を担っていることになると思われてならない。

（会員）

編集後記

◆同人塚山勇三が五月十九日急逝した。享年六十。塚山が教壇に倒れたとき、ポケットには推敲中と覚しい『機関車』と題する詩稿が入っていた。推測するに、さる三月下旬の箱根強羅における同人会の席上、丸山薫が国鉄のある詩人の『爆薬列車』という詩について語ったことに触発されたものではなかろうか。そのとき塚山は、いたく感動の表情で、丸山の話を食い入るように聞き入っていたからである。

塚山が斃れる十日ほど前に四季編集部あて寄稿してきた作品『書棚』は、遺作となってしまったが、次号塚山勇三追悼文集に掲げたい。

大木実が日常の生活を歌って、しだいに人の暮しの哀歓の深奥に迫まってきたように、塚山勇三は久しくつねに病弱で、生と死の間に佇むこと多かったために、いのち見つめる目の冴えてきたところで、突然、死の側にのめりこんでしまったのである。せっかく、あの黒い「死」から逃れて、明るい「生」に立戻った体験を感動をもって歌っていたのに。悲しいことだ。（八木）

◆田中冬二、神保光太郎選による会員の作品は、つぎのような順位であった。

田中選　木曽の櫛（小野夏江）私は一本の木（立花幸子）秋（内田幸雄）時計（坂本俊雄）追想（新倉真知子）花（尾世川正明）しぐれる京都（鈴木たけし）彷徨（鳥羽貞子）路（八木沢幸子）花（田中建市）理由（依田仁美）運河（林英子）食品街（谷田額子）私の子供に（吉田千鶴子）雪（菅原土ノ子）離別（二階堂雄次）今日の朝（日夏堇路）朝（天野中道）遠い日（圓子哲雄）日日（小林重樹）。

神保選　風習（吉田満）彷徨（鳥羽貞子）隅田川の辺りで（池之上篤）子には子の（高畑敏光）しぐれる京都（鈴木たけし）今日の朝（日夏堇路）食品街（谷田頓子）猪（萩原康吉）朝（椎葉朝一郎）雨の夜の訣れ（油谷広）内諸話（大沼功）追想（新倉真知子）遠い日（圓子哲雄）秋（内田幸雄）少年によせる（森真紀）富士（清水和明）木曽の櫛（小野夏江）理由（依田仁美）夜明け（茶川影之介）波乗（鬱木景）。

この別冊は同人と会員、また会員間交流の場であり、会員自身のものです。希望、意見など、みなさんの声をお寄せ下さい。

作品投稿規定

一、「四季」に作品を投稿するものは、「四季」会員に限る。
一、投稿作品は詩三篇まで、評論二十枚以内とし、同人が選考し、推薦作品は「四季」に、入選作品は「四季別冊」に掲載する。（原稿用紙にタテ書のこと）
一、原稿送付先は、100東京都千代田区内幸町一の二の二大阪ビル内「潮流社四季編集部」。原稿には、住所、氏名、年齢、会員番号を明記すること。投稿作品は返却しない。

四季別冊（3）

第11号
昭和46年11月号

雑談二つ……田中冬二
近況……大木実
会員の詩作品

潮流社
東京都千代田区内幸町1ノ2ノ2大阪ビル
<電話>03—504—0478
<振替>東京91375
頒価100円　送料25円

四季の会で……

雑談二つ

田中冬二

最近、宝塚市の中学校の女生徒二人の連名で、私のところに手紙がきました。それは一年生の生徒でした。

それによると、ある教科書に載っている私の詩についての質問ですが、私の痛いところを衝いていて、たいへん参考になりました。

その詩というのは、ごく簡単な短い詩で、『つつじの花』というのです。〝若葉した山のところどころに／火のように燃えているつつじの花／麦の穂も出そろった／明るい縁側で／はちみつのビンにレッテルをはっていた／げんげの花のみつであった／家のなかで／時計が十一時を打った〟というものです。

ところが、その詩について一年生のクラスのなかで「〝明るい縁側で、はちみつのビンにレッテルをはっている〟のは誰だろう。農家の人であるのか、あるいは、この詩の作者であるのか。クラスの四分の三は〝農家の人〟、四分の一は〝作者〟であるということになったが、どちらでしょうか」というのです。先生に尋ねると、先生は「これはどちらでもよろしい。農家の人と解釈してもいいし、作者としてもいい。どちらでもその鑑賞のしかただ」と答えたそうです。私は、この先生の言葉は非常にいいと思いました。

〝明るい縁側で、はちみつのビンにレッテルをはっていた〟というのは、誰がそれをやっていたかがぬけています。主語というか、サブジェクトがぬけている。「誰々が、何をしていた」という〝誰々〟がありません。男が、女が、あるいは婆あさん、娘さんがレッテルをはったとすれば、はっきりします。ところが、文法上どうかと思うけれども、私はサブジェクトを省略してしまいました。

これは、私としては、むしろ男でも女でも、読む人に適当に解釈してもらいたいから、そうしたのです。これは私の読者へのプレゼントなのです。そこを酌んでいただきたい。読者みずから解釈する。そこに詩の面白味があるのではないか。なんでもかんでも説明してしまったら、もう面白味はありません。

できるならば、読む人自身が作者の気持になって、それよりも読む人自身がはちみつのビンにレッテルをはっている気持になってもらいたい。

詩は、申しあげるまでもなく、数学のように2＋2＝4ではありません。2＋2＝6の場合もあるし、2＋2＝1にしかならないこ

ともある。鑑賞の仕方によっては、その詩が高くも買われる。あるいは、ないがしろにもされる。ここに詩の面白味があるのではないでしょうか。

なんでもかんでも詩に説明を加えてしまったら、詩の妙味は、なくなってしまいます。どこか伏せておいて、そこに、作者の想像力によって描かれたイメージに、読者自身も作者と同じような想像力をもって入っていって、美をとらえなければならないと思います。中学校の生徒から質問を受けて、詩というものの、むずかしいことを、さらに感じたわけです。

もう一つ。詩の話ではないが、人の愛ということについて、お話をしたい。

みなさんは、松岡譲さんをご存じでしょうか。松岡さんは夏目漱石さんのお嬢さんの筆子さんをもらわれた人ですね。漱石さんの娘婿です。

松岡さんは、越後長岡の人、堀口大学先生と長岡中学の同窓生です。二人は一緒に第一高等学校の試験を受けました。試験が終った三日目に、一高の前の草原の井戸端で、堀口先生が顔を洗うか、手を洗うかしておられた。そこへ松岡さんがやってきて、「堀口、どうだった、できたのか」「僕はみんなできた。松岡、お前はどうだ」「僕は、きのう一昨日はよかったが、きょうはどうもだめだった。こんどはだめかもしれぬ」と、自信がないようだったらしい。

翌日、発表を見ると、堀口先生は落第、松岡さんはパスしていた。その松岡さんが一高に入った同級生は、第四次『新思潮』の同人である芥川竜之介、菊池寛、成瀬正一、久米正雄などという人々でした。

この連中はいわゆる夏目漱石門下として、夏目家にはしばしば出入していましたが、夏目さんの死後、松岡さんが夏目さんのお嬢さんの筆子さんをもらうことになったのです。ところがこれより先、筆子さんには久米さんが恋慕していたのです。そんなことから連中は、松岡はけしからんやつだ。友人の恋人をとるなんて、と言われ、このグループから遠ざけられるようになった。そして自然文壇とも離れるようになりました。松岡さんはその後『法城を護る人々』という長編小説を世に出しました。

松岡さんの実家は、長岡在のお寺です。そんな関係で『法城を護る人々』という立派な小説を書かれた。松岡さんは一見尊大な傲慢なようで、人ずきの悪い人です。堀口先生も笑いながら、松岡のどこがいいんだろう、色は黒いし、からだばかり大きくて……と冗談を言っておられました。が、事実はそういう人ではないのです。実に立派なかたなのです。

昭和十三年ごろのことです。岩佐又兵衛の『山中常盤』という有名な絵巻物がアメリカに買われることになりました。これは国宝的なものです。これを知った第一書房の長谷川巳之吉さんが、もしこれがアメリカに買われたら、たいへんなことになると、当時、三番町にあった第一書房の新築したばかりの建物を抵当に金を工面して買い取って、その絵巻物がアメリカにいくのをとめたのです。

そんなことがあって、ある日のこと、私は第一書房でその絵巻物を見せてもらうことになりました。一巻だけでも相当長いものでした。

岩佐又兵衛は、徳川初期の画家で、その父親は信長に反抗して、信長から冷遇を受けました。又兵衛は父の死後、信長の息子の信雄に仕えたが、そのうちに徳川幕府になって、又兵衛は江戸へきて、幕府の庇護のもとに一段と絵筆に力を入れた人です。

この絵巻物『山中常盤』は、絵と一緒に連綿と物語が書いてあって、信長に対する一つの風刺、あてこすり、いまの言葉でいえば、レジスタンスとも解されるものが出ています。

第一書房で、その絵巻物を見せてもらったときに、たまたま私より先に二人の客人がありました。松岡さんと灰野庄平氏です。これが私として松岡さんにお目にかかった最初です。

さて、長い絵巻物ですから、相当の時間を要しました。見終った時は夕方になっていました。それから私達は長谷川さんの案内で、ある料亭で夕食をご馳走になりました。その帰りに松岡さんが「田中君、満腹だからひとつ銀座でも歩いてみないか」と誘われました。私はお供をして、銀座へ出るとフルーツパーラーの千疋屋へ寄りました。そこでいろいろ話を伺ったのですが、そのおり松岡さんは、私の数々の愚問にいちいち、あたかも兄が弟にものを説くように諄々と話され、私はまったく感激してしまいました。そして私は夏目さんのお嬢さん筆子さんは流石だと思いました。

それを機会に、その後大井元芝の松岡さんのお宅へ、ときおり伺いました。あるとき、松岡さんから葉書がきて、「私は、長いものを書こうと思っているので、静かな温泉地に行きたい。あなたはずいぶん山の温泉を歩いているが、いいところはないだろうか」とあるのです。そこで私は、上州法師温泉の長寿館という宿屋をご紹介しました。そこで松岡さんは長い小説を書かれた。それが『憂鬱なる愛人』です。これは久米さんの『破船』とか『螢草』に対抗する恋愛小説です。

松岡さんは非常に器用な人です。玉を突かせれば玄人はだしの玉突きをやる。庭球をやれば国際親善試合に出るくらいです。書も絵もやる。しかし、なかなか筆をとることは、文壇から疎外されたせいか、はかばかしくなかった。長岡の郷土史のようなものを書いておられたようです。

私は、そのころ、勤め先の出張所が新潟と金沢にあったので、ときどき信越線で金沢や新潟に行くので、長岡にも立ち寄ることもありました。

あるとき長岡に寄って、松岡さんをお訪ねしました。松岡さんは、長岡の郊外、悠久山という桜の名所になっている公園の社務所に、質素な生活をしておられました。そのとき、はじめて奥さんの筆子夫人にお目にかかりました。さすがに品のいい、美しいかたでした。そのとき松岡さんは、「せっかくきていただいても、たいしておもてなしもできないから、僕が案内しよう」と、悠久山公園のなかの郷土史料館に案内して、いろいろと話をしてくださいました。

松岡さんは一昨年の七月に亡くなられ、奥さんも東京に引き揚げてこられました。松岡さんは堀口先生とは親友でしたから、奥さんも堀口先生のところに二回ばかりこられたそうです。そのときに奥さんが言われた言葉に、私は非常に感動しました。「私は、松岡と五十年あまり一緒に暮しました。ほんとうに楽しい暮でした。貧乏していまして、借家住い、借家住いでした。そして、恥ずかしい話ですけれども、なんどか質家通いもいたしました。しかし、私は五十年を松岡と一緒に楽しく過ごさしてもらいました」と。私は、これこそほんとうの美しき夫婦の愛だと肝銘して、しばらくはなにも言えませんでした。

そこへいくと、私などは、しょっちゅう女房に「お前みたいな愚かな者」とか女房は女房で「あんたみたいな人と一緒になったのは間違いだった」など申しております。まことにお恥ずかしいしだいです。

「四季」同人と会員の会

今年度、「四季」の会を次の要領で催します。ご参加下さい。

日時　十月二十四日(日)午前十時～四時
講師　神宮前・日本信販ドミトリー　丸山薫　田中冬二　神保光太郎　他「四季」同人
場所　神保町
会費　百円(会員以外は三百円)

目の前を通り過ぎてゆく人に

小泉 淑子

寂しそうに　でも少し片意地に
目の前を通り過ぎてゆくあの人を
私は　ここに立って
そして　瞳に映らせているのです
だんだん高くなって
そして　消えてゆく足音を
耳の中にひびかせているのです

でも　私は決して　あの人を
見てはいない
聞いてはいない
私が見ているのは
あの人が連れている無限の寂しさと悲しさ
聞いているのもただそれだけ

あの人の連れている無限の寂しさに
悲しさに
私は責任を感じるのです
胸が痛くなるのです

でも　どうすることもできないことが
わかっているのです

だから　私は　いつだって
ここに立って　こうして
あの人が通り過ぎてゆくのを
見ているのです

遠い朝

孤源 和之

こんなに苦しい夜の中では
おまえは眠れない
はかなく　壊れて過ぎた
おまえのきのうに
朝が来るなんて
そんな白々しいウソがあるだろうか

そしてこんなに淋しい
がらんどうの夜の中でも
おまえの体をゆすっているのは
いったい誰だろう
それはおまえの夜の中にいる
かなしい死の影の手なのだ

そうしてこんなに深い
からっぽの夜の中でも
笑っているのは　誰だろう
誰であろう

秋

内田 幸雄

草むらに小鬼が一匹棲んでいるのです
そっと忍び寄って顔をあげると
すばやく鶏頭の花に化けてしまうのです
風に揺れているのです

鉄のように光った水と
草たちの葬列です
草の根の紅いのは
石にあたった西日の反射です

これは
こおろぎの喰いかけたスズメノカタビラ
夕ぐれは
鶏たちを小舎へ追い込んでしまうと

味噌汁を煮る女の傍に
そっとうずくまるのです
確かにいるのです
庭の方にそんな気配がします

ある夜に——穂高にて——

舟山 逸子

許して　わたしが燃えたことを
許して　わたしが消えたことを
——蝋燭・吉原幸子——

一本の蠟燭から　次々に
火を　移して行った
一つ　増えるごとに
闇は　薄くなっていく
あなたは　幼い子供のように
ひたむきに　瞳をこらし
グーズベリ・ハウスの全部の蠟燭に
火を　移して行った
一つ　點すたびに
あなたの頬の陰は　濃くなっていく
蠟燭の光の中で　わたしたちは

丸木の椅子にかけ
ストーブの
チラチラ燃える　赤い炎を
何も言わずに　見つめていた
土の匂いが　かすかにしたし
ハウスの　石を置いた屋根に
雨も　降りしきった

わたしたちの半分を
闇が支え
わたしたちの半分を
くるみ色の光が　支えた
永遠の　深い沈黙に閉ざされた
彫刻群
その　動かぬ彫像の瞳さながら
わたしたちは　いつまでも
見つめ続けたのだ

——語っていけない愛など
あるはずはないのに！

しかし　ここに
再び立ち戻ることのない時間
燃え上り
燃えつきた　時間の蠟燭

許して　わたしが燃えたことを
許して　わたしが消えたことを

＊グーズベリ・ハウス
信州・穂高町にある碌山美術館の付属館

ひとつの問い

佐賀 啓

なぜ？　と問わぬ魂が果たして
牧人となり得ても
なぜ？　を捨てる魂が果たして
牧歌に住み得るか？

……
なぜ？　草は緑になるの
と春を知らない子供が問う
ぼくらの問いへの毒に満ちた
すでに裏切られた祝福で
……

すべての行為の後に用意された言葉がある
《しかし　なぜ？　と
ぼくら　そればかりをくりかえし

一日の
きのうと同じ夕暮の
残された微かな光に賭けて
なおも問うか
失なわれた答えを求めて
《どこへ？　と

紅きもの

杉浦　正一

私に近似した映像(もの)として
枯れの季節に停まるものとして
私の分身のごときものとして
私は愛していた

葉鶏頭を
凍ての秋に
身を削がれつつ
空間になおも越えむと
身慄ふもの
紅きもの

旅

諸貫　寛

過ぎてゆく山々
過ぎてゆく田畑
豊かな平野をかなたに
労働と報いとを悦ばしげに
人間と自然のあいだにあって
自分に許される限り
優しい希望を恵むもの

透明に旅の日の
樹や川や風が通り過ぎると
おまえの中に浪うついのちの流れは
時ならぬ花々となって
私の頭上に黄金のように光る
火照った感覚は
さわやかな羞じらいで満たされる

私は太陽のためにうたいたい
大地のためにうたいたい
己の精神をくぐりぬけ己を極めたい
旅は人生の中の

ひとつの重みではないか
めぐり会う人間と自然
愛し合う自然と人間
そして山を越えてゆくもの

旅
旅の中の私よ
人間をさけて
人間の智恵の遥かなところに
なにを知る
なにを求める

自然はじっと立っている
私はその愛にうたれる

青空の中に

園　育

青空の中に
悲しみを
みた
時の流れ
そこは言葉のない

寂寥の空間
青空の中に
悲しみを
みた

夏の終り

日夏　聖路

蒸暑い夕方
まだ遠い台風の尖兵のうねりが防波堤を越
え
海岸道路を洗う
打上げられた舟虫や小蟹が這いまわり
それを拾う子供たちの甲高い声
いつまでまっても沖合に
それらしい海境は視えない
寄せる波も　漂う雲も
どっちが波で
どっちが雲なのか覚束なくなり
鳥というものが翔け
魚というものが跳ねたが
それさえ　どっちがどっちなのか分らなく
なり
魚は鳥の影かも知れぬと思い

またその逆なのかも知れぬと思う
だんだん稀薄になってゆく視線
ごろりと横になる
髪の毛が湿ってちらかっている
色蜘蛛が蛾をねらって天井を走る
大の字に眠る少女の砂まみれの額や足裏
簡素だけれどいささか甘美さに欠ける
漁師の兼業する小さな宿で　この夏の
短かい休暇をとりとめなく見送る
このまま生臭く帰ることのさびしさを思い
帰る処が在ることの奇怪さを思い
せめて少女には新鮮な祝祭であれと
同じことばかり繰返し思い

《死》

Dance of Death
——わたしは死ぬ——

小野　夏江

青春がいまや崩れ去ろうとする
それが　わたしには
はっきりではないが　わかる
わたしの皮膚が時の経過を感じるから

無闇に霧雨の中を翔り
星のまなざしを手に受け

麝香薔薇の中で眠り
青い初夏を抱き

それらの日々を
わたしは地下に埋めねばならない
これからわたしは
盲(めし)にならねばならないのだろうか

踊れ踊れ踊れ！
誰かが叫んでいる
誰が？

旅立ち

新倉　真知子

息苦しそうに黙ってばかりいたお前が
青い風をつくりながら歩き出す
ひとつの言葉を求めて
長い旅に出る　と
お前のさみしい肩が呟く

傷つけ合った日々を
宝物のように背負って
コスモスの花影で小さく笑うお前は

いつか　かもめに姿をかえる
そうして　ちぎれ雲のように
果しない空を飾ってゆくが
お前は　まだ気づいていない
ぼんやりとした形の中で
お前の願いや
お前の痛みが
息づきはじめているのを
空よりも果しない旅へ
ひとつの道しるべさえない旅へ
お前は　溶け込むように旅立っていった

星への歌

紫野　京子

星をちりばめた　あなたの
　心がほしいから
私はうたうのです
　星は私の愛
何処(いづこ)からともなく
　かすかに降りそそぎ
去っていく足跡にも似て……
コトコト　コトコト……
いいえ　あれは闇夜に戸をたたく
　透明な風の音
それとも
闇から闇へと葬り去られる
　幾千幾万もの
　〝夢〟のかげなのでしょうか

病葉

熊沢　雅晴

若葉から
豊饒な青葉へと移る五月後半の樹々の下に
　は
必ずと言って良い程
病葉が幾枚か　なまなましくこぼれている
病葉は　散って黄ばみ
尚も　死ぬまいとしている
もとの葉むらを洩れる僅かな陽に映えなが
　ら
きれぎれの
うす蒼い悲しみに似て……
そして
みんな離ればなれに
束の間の位置を占めて
ひっそりと横たわるそれらの葉たちの下に
　は
重い大地がある
季(とき)を待たずに散ったうら若い葉たちのむく
　ろを
じっくりと吸いとって自分のものとする
貪婪なまでに慈悲深い大地がある

軍の思い出

田中　寿男

海の見える鹿児島から
球磨川べりの小学校に軍は移動した
　——戦は終った
夏の終りの市房街道はからからに乾き
僕ら兵隊たちは焼け果てたであろう家郷を
　思ったりしていた
曹長は毎日午後のきまった時刻に

刀を抜いて狭い部屋の壁に突き刺した
もの倦い　暑熱のこもる部屋の昼下り
　——僕は曹長をなだめ刀を納めさせる役目
　であった
曹長は年長の僕を頼りにしていたし
　僕は曹長を力強い存在だと信じていた
あれから二十年が過ぎた
高橋曹長はあの清流のさらに奥の小さい山
　合いの村で
腕利きの大工として励んでいるのであろう
　か

天球

市川　敏幸

春
フォルテシモは天上を打ち
風は頬を冷たくする
ああ　遥かなる海鳴り
夏
蟬の声は遠退き
向日葵はゆっくり首をめぐらす
列島には嵐が接近しつつあった
秋
菊は折れ
連山すでに雪を冠る
終日　青空の放心
冬
暗い壺に詰めて流そう　古の物語
灯はほそく凍り
ふいに　のしかかる天球

子

圓子　哲雄

一日はお前をそっと包み始めていった
やがてお前はぼくの影から起き上り
放たれた小鳥となって
明日の中に馳けていった
ぼくは淋しくなって
掌に残っている
お前の温もりを
いつまでも抱きしめていた

塗られた恐竜

柳川　史子

公園から走ってきた坊やの胸に
緑色の恐竜が抱きしめられて
まるでおっぱいをもらっている赤ちゃんの
　ようにおとなしく
鎧のおどしのようなしっぽのギザギザがよ
　ちよちゆれる
背なかを赤と銀とでまだらに塗られた恐竜
　は
両手　両足をパッとひろげ
坊やの胸の中にいる
しだの大木の生いしげる
山と　水と　空だけの青い地球で
体長五十メートル　高さ二十メートル
その力は何百メガトン
何よりも強く　たくましく
空を飛び
水をくぐり
氷河をわたり
不死身の英雄ステゴザウルスと
雌恐竜のあこがれであった彼が

白い画布（キャンバス）

三木　朗

すべての色を
拒否し続けている
白い画布だって
いつまでも
そのままでは居られない

いつかは
抵抗することに疲れ
あるいは
自らの妥協によって
何者かに塗られてゆく
何物かが描かれてゆく

あくの強い
油絵の赤が塗られてゆくのか

まるでいやいやをしている赤ちゃんのように
無心に坊やの胸の中から
青い空を見あげている

意味の解らない
抽象画が描かれてゆくのか

しかし　それが
抵抗に疲れた時——
妥協した時——
「何者」に相当するのは
この私であると決めている

蛾の希い

依田　仁美

彼の周囲には
香を放つものは何ひとつない
赤い眠は燃え
悔いの触角はぴんとふるえ
時がぴりりと緊張する

豪華なソーファと造りもののレモン

彼の周囲には
全く香りがない
（まちがえて入ってきた部屋だ）
腹は膨れ

ひくつき
苛立ちの口がつややかな葉をおそう

白い電話と造りもののレモン

クエン酸の香りどころか
（……はたしてかじったのは徒労だった）
腐敗臭も
体臭も
プロパンガス臭も
何もない

生命の営みは
ことごとく白亜にぬりたくられ
金にふちどられ
レースをかぶせられた　ここでは！

彼の触角は
ぴんと怒っても
怒りをとどめる脳はない

香りのない空間
かげりばかりの刻
水に浮かべられた

手紙

坂本　稔

紙ボートの上で
生きながら　ともがらと
火をつけられ
燃えつきる情死の夢を
らんらんと眼は
赤く
希うものを！

いったい何が欲しいのか
そう問いただされて
ぼくは
いう

憂愁に満ちた
ひとつのまなざし

じっさい
もうそんなものはこの世には無いのだが：

雪が降っている

初雪が
けれどそんなものではないのだそんなもの
では

春の幻想

徳永　伸助

石垣のとある石に
おりたった蝶は
いつしか石垣にとけこんでしまった

蝶の魂を得た石垣は
ひそひそと語りだした
ゆれだした

……

やがての後に車のきしみに
石垣から蝶がとびたった
石垣は再び百年の眠りにもどった

小夜ノ中山

平松　文平

一里塚の石ぶみのまわりは
竹の子の群だ

坂のくぼみに
椎の花が吹きよせられていた

楠林を抜けると
ぱあっと斜面が開けた
遠い谿まで　茶の畦（うね）の波——
新芽のかがようその上を
小鳥らが鳴きつれて飛ぶ
あわわが岳の空の方へ

沓掛の坂あたりに
うたがしている
日坂の幼稚園児らが
こえ張り上げて帰って来るのだ
あの急坂を
はちきれるように　楽しげに
声をあわせて登って来るのだ

近況

大木　実

辻野勘治先生（僕の「少女」という詩のなかの旧師）が和歌山から御上京になり、三十年ぶりでお目にかかることができた。先生は僕よりひとまわりうえの丑年でことし古稀である。痛風で足が御不自由と承わっていたが、年齢よりはるかにお若くお元気であった。あいにくの雨でくるまで大宮の町と氷川神社をみていただいたが、青年のころ大宮においでになったことがあるとか、身をのりだすようにしてごらんになり、懐かしがられた。先生には歌集「滴」（したたり）がある。三十年後お目にかかるとき、先生は百歳になられ僕は八十八歳になる筈だ。

父の日には、娘が折たたみの洋傘を贈ってくれた。僕の使っている洋傘がひどくなっているのをみていたらしい。娘をもったことを僕は人生の幸福のひとつに数えているが、これは洋傘を貰ったから云うのではない。

（同人）

会員規定

一、会員は、会費半年分二千五百円を収めたものとする。会費は、「潮流社四季編集部」へ送付のこと。（振替東京九一三七五番）

一、会員には、隔月刊「四季」および「四季別冊」（毎号添付）を送付する。

一、会員には「四季」の主催する講演会、研究会に、そのつど案内状を発送し優待する。

一、会員は、潮流社発行の「四季」同人の出版物を特別価格で購買することができる。

「四季」の会

今年度、「四季」同人と会員の会を次の要領で開催します。お友達をお誘い合わせのうえご参加下さい。

日時・十月二十四日（日）午前十時～四時迄

場所・神宮前・日本信販ドミトリー

出席・丸山薫、田中冬二、神保光太郎、大木実、伊藤桂一、野田宇太郎、その他「四季」同人

会費・百円（会員以外は三百円）

なお詳細は追って通知いたします。

編集後記

■今回の会員作品百九十八篇のうち、田中冬二、神保光太郎が二十篇を選びました。そのうち田中の推薦作は、池上和子氏の「北国の女」、神保の推薦作は、水野ひかる氏の「ながい一日」でした。他に丸山薫推薦、会員遠藤進夫、畠中哲夫両氏の作を掲げました。

会員の作品は、すべて高水準にあって、さしたる径庭もなく、その選考と推薦には、なみならぬ苦労があるようです。次回からは田中、神保とともに伊藤桂一の三人が選考に当たることになりました。多くの同人が選考に参加するようにしたいと考えています。

こうして、かつて「四季」から立原道造、津村信夫、杉山平一、塚山勇三などが巣立ち天翔けていったように、この新しい時代にふさわしい新星が生まれいで、詩宇宙に輝くことを期待します。

■このたび、田中冬二が日本現代詩人会の会長に、常任理事に伊藤桂一が推挙されました。近ごろ欣快のことです。田中、伊藤の身辺は、ますます多忙となるでしょうが、会員とともに加餐を祈りたい。

また会員木津川昭夫氏の詩集『幻想的自画像』（題簽・神保光太郎、序と解説・更科源蔵、荒木亨両氏）が、当潮流社より刊行されました。一読をおすすめします。